

英雄が、世界を壊す。

プロローグ

その日、綾神学園のグラウンドでは一学期の始業式が執り行われていた。

雲一つない満点の青空の下。整然と列をなしているのは、それぞれ目を引く制服に身を包んだ学生たちである。女子は赤を基調としたドレスのようなもの。男子は白を基調とした軍服のようなもの。紅白が並ぶ鮮やかな光景は、遠目に見れば祝典に掲げられる錦のようだった。生徒たちの側には教師たちが一列に並んでいる。生徒も教師も皆が皆、口を噤み、ただ前方を睨んでいた。

彼らの視線を集めるのは、前方に置かれた鉄製の朝礼台——その上に立つ麗人だった。

赤い髪を一つに束ね、艶やかな長身にスーツをまとった女性である。薄く色の入った眼鏡の奥には、冷淡な瞳がわざとらしく揺らぐこともなく、凛として潜んでいた。

彼女の名前は化野早苗。この綾神学園高等部の教師である。

化野はスーツの胸元から数枚の紙を取り出し、グラウンドを眺め回して口を開く。

「諸君。本日もまた、理事長は不在である」

淡々と事務的な声色でそう告げ、紙を広げる。

「ふわあああああ……」

「よつて新学期の挨拶は、今回もまた私が代わりに読み上げさせてもらう。心して聞くといい。……『おはよう生徒諸君。本日から新しい年度が幕を開けることとなった。』これまで以上に勉学に励みましょ。う。」

心身ともに、健やかな学園生活を送りましょ。

ありふれた言葉の数々。それをその場の全員が例外なく真剣な面持ちを浮かべて聞いていた。

辺りに充満るのはどこか静謐な空氣である。

誰ひとりとして私語を漏らさず、咳払いの音さえしなかつた。

一種の宗教儀式めいた莊厳さが漂う中。

「ふわあああああ……」

野々柳竜司は、緊張感のかけらもないあくびを大声で披露した。

瞬間、静寂が揺れる。だが、手紙を読み上げる化野はかすかに声を震わせもしなかつた。周囲の生徒たちも何ら反応を示さない。

かわりに満ちるのは身じろぐことすら躊躇われるような、汚泥にも似た粘つく気配。日光がわずかに強まり、大気がかすかな揺らぎを呼び始める。重々しい空氣の中、竜司は瞼をこすつてほんやりとつぶやく。

「あ……ねい」

「ふふ」

そんな竜司に、側の少女がふんわりと微笑んだ。

一級の彫刻品めいた美少女だった。腰まで届く、ゆるくウエーブのかかった銀の髪。血潮の
ように赤い瞳。きめ細やかな白い肌に、幼さの残る愛嬌のある顔立ち。稀代の芸術品が命を持つ
たと言わても万人が納得しかねないほど、その少女は煌めく美しさを有していた。

ツーサイドアップにした髪をふわりと揺らし、少女は鈴が転がるような声でくすくすと笑う。
「ちょっとくらいなら、眠っててもいいよ、りゅーくん」

「んー……そうだなあ」

ぱりぱりと頬を搔き、竜司は自分の顔を覗き込む少女に、竜司は笑つて答える。
「ほお

「ま、少しくらいなら我慢するさ。ありがとな、リリティカ」

「えへへ、どういたしまして」

そう言うと少女——リリティカはいたずらっぽい微笑みを浮かべてみせる。

二人がいるのはグラウンドの中央。

生徒たちが居並ぶその中心部にある、奇妙な空所だった。

半径五十メートルほどの円形のスペースである。その場を取り廻むようにして『KEEP
OUT』と書かれた黄色いテープが張り巡らされ、まるで事件の現場であるかのような物々し



さを醸し出していた。中にいるのは一人の少年と、一人の少女。竜司とリリティイカ。たつた二人だけである。

二人も周囲の生徒たちと同じように学園の制服に身を包んでいた。ただし竜司の制服は他の生徒とデザインこそ同じものだが、色は白から程遠い黒を基調としたものだ。見渡す限り広いグラウンドの中で、その色の制服を着ているのは竜司のみである。

上着のボタンを留めることなく、中の赤いシャツを堂々と見せるその着こなしは、一見すると素行不良の学生だ。それでも人懐っこいその顔つきのおかげで、さほど印象の悪さを感じさせない。

カラフルなピクニックシートを広げ、その上で竜司は仰向けに寝転がっている。

そして、リリティイカはそんな竜司の頭を自分の膝に乗せていた。いわゆる膝枕である。「ところでりゆーくん。この眺めはどう？ 總景でしょ？」

「眺め……？」

竜司は視界に入るものを確認する。

曇りのない青空と、眩しく輝く太陽。そしてリリティイカの顔。以上。

「別に普通の眺めだけど？」

「ええー？ なんだかすばらしい、山脈っぽいものが見えてると思うんだけどなー？」

リリティイカは腕を組み、不自然なほどに背を反らせて胸を張る。

何を主張したいか丸分かりだった。ただ残念なことに。

「お前のそれは……山って一より平原だろ」

「むつかー！」

べつたんこな事実を突きつけてやると、リリティイカは怒りを顕わにして目を吊り上げた。

奇跡の美少女然とした容姿でそんな子供っぽいことをするものだから、怖さよりもむしろ可愛らしさが際立つた。だから睨みつけられても、竜司はしつつといらされたのだが。

「平地だって言うのなら！」

「うおう!?」

突然シートの上に転がされたかと思えば、リリティイカが覆いかぶさるようにして上に乗つてくる。竜司は目を瞬かせながらも起き上がるがろうとするも、がつしり抱きつかれてしまつて成す術もなかった。

男の自分にはない柔らかさと、火傷しそうなほどに熱い体温が痛いほどに伝わつて、蜘蛛の糸のように細い髪が頬を撫でると、シャンプレーの甘い匂いが鼻腔をくすぐつた。

見慣れているはずのリリティイカの顔も、さすがに数センチの至近距離で見つめてしまえば、

言葉に詰まる竜司にリリティイカは顔を近づけ、不敵な笑みを浮かべてみせた。

「おっ、押し付けてもないものはねえんだよ!!」

「ええー、じゃあ開拓してみる? りゅーくんなら……い・い・よ?」

「実る可能性のない土地に手出しするほど俺は暇じゃねえ!! いいからどけ!!」

とは言うものの、決してリリティイカの胸が皆無なわけではない。

小ぶりとはいえ、その弾力は本物だ。暴力的だった。ふにふにとしたその感触ブライスレス。

押し付けられれば当然意識するし、心が無性にざわざわした。

ぎやーきやーとじやれ合い、ふざけ合う二人。

そんな中でも、壇上の化野は、滯りなく演説を続けていた。

そして生徒も教師も、誰ひとりとしてそのスペースを、その二人を気にかけない。まるで世界にとつての異物であるかのように、知覚することを認めない。

何故なら一人は、彼らにとつての宿敵だった。

たった二人だけが空気を読まない時間が続き、やがて化野が理事長からの手紙を読み終えた。

「……以上。それでは本年もまた、この学園おのが使命を果たすべく、邁進まいしんしてくれたまえ

そう締めくくると化野は書状を懐ふくろに戻し、あらためて生徒や教師たちを見渡す。

その場の全員が真剣な表情で、化野の次の言葉を待っている。

「もお、りゅーくんつたら恥はずかしがつちやつてえ」

「だーかーらー!! 人の話を聞け!!」

竜司とリリティイカを除き。

だが化野は動じない。生徒も、教師も誰一人として動じない。

「では諸君しょくくん……かつて異世界を救いし英雄ヒーローたちよ。我われらが敵相手を……」

化野がおもむろに右手を掲げ、人差し指を竜司とリリティイカに向ける。

高等部二年S組担任、化野早苗——二つ名は『天獄燭台ジャック・オーライムの番人人間』。

十年前、異世界カリュキスに召喚され、墮神戦争を治めた偉大なる業火ごうかの魔女まじめの女。

化野は自らの力を指先に込め、練り上げ、舌に乗せて解放する!

「討うち滅ぼせ!!」

その瞬間、竜司とリリティイカの場所に、突如として天を衝くほど巨大な火柱が立ちのぼる。

あまたの魔物を屠り、カリュキスを支配していた墮神だいしんをも焼き尽くした彼女の切り札。

『断獄台レス・ペイン』。ゆがめの凄まじい熱の塊に二人は呑まれ、その姿は紅蓮ぐれんの向こうに消えてしまう。

次元すら歪める凄まじい熱の塊に二人は呑まれ、その姿は紅蓮の向こうに消えてしまう。

その炎に間髪いれず。

「うらああああああああ!!」

気合の大声とともに、生徒たちの間から大柄な男子生徒が躍り出る。

高等部三年A組、赤守晴人——二つ名は『武勇城』。

異世界ハルバートの弱小国家グランフォーレの巫女に導かれ、魔道国家ダグラムからの長年

にわたる侵略戦争に終止符を打った若き戦士。

彼が両手を振り上げると、その頭上には何百本という銀の剣が現れた。

「くらいやがれ！ 星戻！」

銀の剣は一斉に空を切り、けたたましい金属音の大合唱を伴い火柱めがけて飛翔する。

ダグラムの操る何万という死靈兵たちを、その魂の呪縛ごと断ち切った一騎当千の大技だ。

また、そのすぐ後に。

「……よ、……き……いざ、な」

小さな、確かな力を帯びた声が生徒たちの中から漏れ聞こえる。声の主は小柄な女子生徒だつた。

中等部二年B組、秋仗千人——二つ名は『魔偽科』。

異世界ビ・スクリュの狂科学者ラブストレンジにより、禁忌とされていた魔道改造手術を施された生ける兵器。同じ境遇の兵器たちと元凶のラブストレンジを掃討した、力ある言葉を彼女が静かに紡ぐこと、周囲に肌がひりつく威圧感が満ちた。

「……天明陣術 第五の相」

瞬間、火柱の真上に、赤錆にまみれた異形の機械が出現する。

その巨大な機械はギヂギヂと耳障りな音を立てて鳴動し、白い光を帯び始め——

「陥……です」

機械から眩い閃光が放たれ、耳を劈く轟音とともに化野の生んだ火柱に突き刺さる。その正体はブラックホールすら貫き壊す、でたらめなエネルギーが凝縮された雷の大槍である。容赦のない猛攻の連打。

まぎれもない殺意を持つた異能の数々。

世界を救いし英雄たちの、持てるすべての力を賭した大技。

それらを受けて無事でいられるような生き物が、存在するはずもない。

「ひどいなあ」

存在しない……はずだった。

突如として火柱と雷が幻のように焼き消える。

飛びさる剣も、すべて慣性の法則を無視してその場に虚しく落下する。くすぶる煙の中、そこに平然と立っていたのはリリティカだった。

彼女を中心として、彼女を護るようにして、薄い黒色の障壁がドーム状に出現していた。

リリティカが持つ、あらゆる異能を無に帰する、絶対防護の力である。

その外側の地面はまるで地雷でも炸裂したかのように大きく抉れ焼け焦げているが、内側にいたリリティカと、その足元であぐらをかく竜司には、かすり傷一つついていなかつた。

【禍の紡織衣】……解除】

リリティカがつぶやくと同時に、黒の障壁は音もなく消失する。あとには熱氣すら残らない。有無を言わせぬ威圧感をもとい、リリティカは竦む赤守に微笑みかけた。

「人がいちやいちやしてるところを邪魔するなんて……悪い子にはおしおきが必要かな？」

【ちつ……化けモンが……!】

赤守は吐き捨てるように言うと踵を返し、生徒たちの間に紛れてしまう。

それを見送り、リリティカは「あーあー」と残念そうな声を上げた。

「逃げられちゃつた。じゃあ、誰か代わりにおしおきされたい人はいるかなー?」

答える声はない。

武具を顕現させる者。

力ある言葉を紡ぐ者。

ただ見守るだけの者。

ただ三者三様に、二人をまっすぐに睨みつけるだけだった。
ようやく彼らは竜司とリリティカの存在を認知した。
自分たちが討つべき敵として。
緊迫し、凍りついた空気の中。最初に動いたのは——

【おつと】

【ありや?】

竜司がリリティカの目の前に躍り出る。

リリティカが不思議そうな声を漏らすも、竜司はお構いなしで。

【セコい真似してんじやねーぞ、つと】

サイレンサー付きのライフルから放たれ、いましがた素手で掴み取ったばかりの銀の弾丸を、竜司は力一杯に飛んできた方向——約十キロ離れた山地に向けてぶん投げる。
数学教師、桟坂影時——二つ名は『欲の眼』……の悲鳴と、その得物が碎けるのを、竜司は常軌を逸した視力と聴力とで確認する。
は常軌を逸した視力と聴力とで確認する。
これで制裁完了だ。

それを見ていたリリティカは、竜司に困ったように笑いかける。

【あれくらいちゃんと防げたし、避けることだつてできたよ? でもでも……りゅーくんかいすきー!!】

「ああもういちいち抱きつくな!! いいからとつとつやるぞ!!」

「もう、素直じゃないんだから。でも、りゅーくんの仰せのままに!!」

リリティカは竜司の右手を両手で包みこむ。そして、祈るように目を閉じた。

すると彼女の体から、『禍の紡織衣』と同じ闇色のオーラが立ちのぼる。

「出番だよ。アウスレーゼ!」

リリティカの力強い呼びかけに応え、竜司の真上に奇妙な大剣が現れた。

その剣は竜司の背丈をしのぐほど長く、その胴体よりも太く、縮尺が狂ったかのように巨大である。無数の傷が刻まれ欠けの目立つ刃は、竜の顎を思わせた。

そしてなによりも目を引くのが、剣身に何重にも巻きつけられた、銀に輝く鎖だった。

悍ましいほどの邪氣。生きとし生ける者すべてに向けた敵意。希代の名画にヘドロをぶちまけるような、冒瀆的な嫌悪感。ありとあらゆる負の念がない交ぜとなり、それが形になつたような……禍々しい魔剣である。

竜司はその大剣——アウスレーゼを擗み軽々と肩に担ぎ上げると、取り巻く周囲の者たちを睨みつける。

「ようよう。さつきはよくもやつてくれたな、と言いたいところだが……ま、許してやるよ」

そして、獰猛な笑みを浮かべてみせるのだ。

「どうせお前らは俺に勝てないんだ。だからせいぜい全力で手の内を見せてくれよ。俺はそれ

「さあて、次に先陣を切ってくれるのはどこのど——」

「宿れ閃光!! クラウソサス!!」

以上の力を軽く出して、お前らをちやつちやと絶望させてやるからさ」

『……!!』

竜司の安い挑発に、真っ向から囁みつく者はいなかつた。

だが、周囲の大部分の者たちがその言葉を受け、自身の得物を握る手に力を込め、竜司を睨む。彼らの反応が上々で、竜司はますます笑みを深めるのだった。

「さあて、次に先陣を切ってくれるのはどこのど——」

「宿れ閃光!! クラウソサス!!」

何の前触れもなく、澄んだ殺気が竜司の背後で生まれた。

素早く振り返る竜司の視界に、一人の女子生徒が飛び込んでくる。

それは柘榴石のような煌めく髪を持つ、凛とした面持ちの少女だった。

少女はほのかに輝く細身の剣を下段に構え、まつすぐに竜司たちを睨んでいた。

(ん……?)

竜司はその少女に、かすかな引っ掛かりを覚えた。しかしそのことに考えを巡らす前に、少女に触発されるかのよにして四方八方から新たな襲撃者が飛び出していく。

武器を携える者、呪文らしきものを詠唱する者、はたまた素手の自然体でいる者など。実際に様々な猛者たちが竜司たちに向かってくる。上がるのは怒声。巻き上がるには砂塵。天地を揺るがす勢いで駆けるそれら全員の眼には、純然たる殺意の炎が灯されていた。

しかし竜司は動じない。むしろぐるりと襲撃者たちを見渡して、余裕の笑みさえ浮かべてみせる始末だった。

「よーし、御一行様だな。そんじゃ行くぜ！」

そう言うが早いか、竜司はアウスレーゼを両手でしかと握りしめる。

そして剣身を鎖で封じられたそのままで、ただまつすぐに振り下ろし——
「吹っ飛びやがれザコどもがああああああああああああああああ!!」

アウスレーゼの剣先で、地面を軽く叩いた。

空気だけを斬り裂く、名称すらない、無意味な一閃。

しかし一拍の間を置いて、アウスレーゼの剣先から膨大なエネルギーが生まれた。リリティカの『禍の紡織衣』よりも色濃い、ただただ闇を凝縮させたかのような黒の力。それが世界を揺るがすほどの爆発を引き起こす。

黒のエネルギーは地面を割り砕き爆走し、竜司たちに到達する寸前だった魔法攻撃のすべてを、殺意を持って進軍していた者たちすべてを吹き飛ばす。耳を聾する轟音を上げて縦横無尽に荒れ狂い、その他大勢を無差別になぎ倒す。

その様はまるで、獲物を求めて疾駆する獣の群れのようだった。

まるで圧倒的な、暴力的な力。

あちこちから悲鳴が上がり、人々が怒声を上げて逃げ惑う。
その凄惨な光景を前にしてリリティカが楽しげな声を上げた。

「おおー、さすがりゅーくん。圧倒的だねえ」

「俺がすぐーんじやねえよ。あいつらが弱すぎただけだ」

「ふふ……し・か・も」

リリティカはいたずらっぽい微笑みを浮かべ、竜司を指し示す。

「あの状況で女子一人を助けちゃうんだもん。強い上に男前すぎるだなんて！ それでこそりゅーくんだよ！」

「はつ、当然のことを言うなっての」

茶化すリリティカに、竜司は事も無げに笑つてみせた。

竜司の腕の中には、先ほど先陣を切った女子生徒がいた。体を強張らせて目を丸くする女子生徒だが、無論のこと偶爾竜司の猛攻を避けて懷に潜り込んだというわけではない。

「おい、大丈夫か？」

「い、つつ！」

声をかけたその途端、女子生徒は声にならない悲鳴を上げて竜司からばつと飛び退いた。そして距離をとり、剣を構えて威嚇する。そこであらためて、竜司は彼女のことをじっくりと観察することができた。

整った顔立ちに、二つくりにされた綺麗な長い髪。竜司とリリティカを睨む瞳からは、力強い闘志を感じられた。

リリティカに負けず劣らずの美少女だ。だが、リリティカとは比べ物にならないほど胸は豊かである。その上全体的なプロポーションも完璧。ただし残念なことに……。

竜司はそのことに気付き、顔をしかめて視線をさっと地面に落とす。

しかし女子生徒は竜司の変化を気にかけることもなく、怒気を顕あらわにして声を荒げるのだ。

「な、舐めた真似をしてくれるじゃない……敵を助けるなんて一体どういうつもりよ……！」

「いやだつて、なあ

「勢いよくすこ転ふよくなマヌケ

まか !?

女子生徒が顔を真っ赤にして言葉を詰まらせる。

その足元には太陽の光を受

という三年生が放つたものだ。

彼女はそれらのうちの一一本に躊躇^{つまづ}いて、竜司の目の前で思いつきり転倒したのである。竜

アウスレリゼを振り下ろしたのと、ほぼ同じタイミングで。

そんな間抜けな展開に驚いて思はず助けてまつぱながう。竜司はいのちをばんばん

そんな間抜いを展開い観いて思わず思いてしまいかがいかが 章云いとては此絶たん

だがしかし、もっと別に言及しなければいけないことが生まれていた。

竜司は視線を逸らしたまま、女子生徒に軽く頭を下げる。

「まあ、助けたのはそんな理由なんだけど……その……悪かつたよ
【あ…………?】あんた一本可を――」

女子生徒は搔き、肩を震わせ、見線を下へ

女子生徒は軽く眉を顰め、視線を下げる。

そこでようやく自分の姿に気付いたようだつた。悲鳴を上げてその場にしゃがみこんでしまう。彼女の制服は、見るも無残にズタズタだつた。スカートは少し裾が破けている程度だが、上の部分はもはやぼろ雑巾ぞうきん以下。下のシャツも同様で、薄いピンクの下着と健康的な素肌がすつかり露わになつていて。どうやら先ほどの余波でこうなつてしまつたらしい。

震える女子生徒を前にして、リーティーがにんの少し貧弱な。目で言葉を読み、つづける。
「助けてあげたのはえらいんだけどさあ……りゆーくん、まさかわざとこの子の服だけ狙つて
やったとかじゃないよねえ……？」

竜司は全力で無実を訴えた。実際のところ、女子生徒に被害が及ばないよう、ちゃんと力

加減をしたつもりだった。

心配して確認するが、女子生徒の素肌には傷一つついておらず一安心。

だが、羞恥のせいか赤く染まり始める彼女の肌の前では、そんな言い訳は無意味だった。

竜司は慌てて自分の上着を脱いで、女子生徒に差しだす。

「わ、悪かったよ。ほら、これでも着てる」

「……え？」

女子生徒は目の端に涙を溜めて、ぽかんと竜司を見上げる。

その目に竜司はほんの少したじろぎ、顔を背けてぶつきらぼうに言う。

「俺みたいなバケモンの着てた服なんざ嫌かもしんねーけど、そのまままでいるよりよっぽどマシだろ。どうせ代わりはいくらでも学園から支給されるんだ。返さなくともいいからよ」

「え、え、ちょっと、あのっ」

「いいから着てろ！ 風邪かぜでも引かれると俺の寝覚めが悪いんだよ！」

女子生徒に無理やり上着を押し付けて竜司は周囲に目を向ける。

いつしか力の爆発は收まり、辺りには重々しい空気が立ち込めていた。

巨大な獣が残した爪痕くわきずのような深い轍わだちが刻まれた地面。あちこちに伏せて転がる襲撃者たち。

彼らの口から漏れ出る呻き声が、難を逃れた者たちの耳朶じだを打ち、その闘争心を削り取つた。

もはや二人を取り囲んでいた生徒の輪は倍の大きさにまで広がつており、次の襲撃が起こる



気配は微塵もない。誰も彼もが周囲の様子に落ち着きなく視線をやり、たつたの一歩も踏み出しあつた。

「お前は少ない語彙で煽るのうまいよなあ……尊敬するわ」

「え？ そうかな？ えへへ、みんな聞いてよ！ りゅーくんにほめられちゃつた！」

「ダメだよりゅーくん、そんなこと言つちや。みんな弱いなりにがんばってるんだよ。あんまりいじめちや可い想でしょ」

「お前は準備運動にもなんねーぞ。誰でもいいから出てこいつて。一瞬で捻り潰してやるからよ」

「ダメだよりゅーくん、そんなこと言つちや。みんな弱いなりにがんばってるんだよ。あんまりいじめちや可い想でしょ」

「お前は少ない語彙で煽るのうまいよなあ……尊敬するわ」

「え？ そうかな？ えへへ、みんな聞いてよ！ りゅーくんにほめられちゃつた！」

「好き勝手に言う竜司とリティカに、誰ひとりとして何も言わない。

「まあ……所詮はこんなところだろうな」

壇上ですべてを見守っていた化野が、時計を確認してつまらなさそうにため息をつく。

今日の記録は三分二十六秒。集団での討伐としては、まあ持った方の記録である。

化野は声を張り上げ、グラウンドにいる全員に告げる。

「諸君！ 本日の集会はここまでとする。明日からはこれまで通り学園の規則に従い、各自彼

らの討伐に励んでくれたまえ！」

それに対して、誰も、何も応えない。

ただ、ごくりと喉を鳴らす音だけがあちこちから聞こえてきた。

漂う緊張感を吹き飛ばすように、竜司がアウスレーゼを高く掲げる。太陽に照らされ、剣身に巻き付く銀の鎖が目も眩むほどの輝きを放ち、その鋭利な白光は死神の鎌を思わせた。

その場の全員の注目を一身に浴びながら、竜司が、リティカが叫ぶ。

「ようよう雑魚ども！ 今年度も俺たちと仲良く遊ぼうじやねえか！」

「いつでも相手になつてあげるんだからね！ 感謝してくれたつていいんだよ！」

そして二人は宣言する。

異世界を救つた経験を持つ奇跡の英雄……《救道者》たちに。

「この世界を救いたいのなら……俺たち《災厄の魔獣》を倒してみせろつ!!」「みせなさいつ！」

一章

エンブリオ・イーター
《災厄の魔獣》

綾神学園は、絶海の孤島に建設された中高一貫の学校である。

生徒や職員たちは全員が例外なく島内の寮で、卒業するまで共同生活を行う。

島は東京都ほどの広大な面積を誇り、学園だけではなく、スポーツ公園やカラオケといつた娯楽施設から、手つかずの自然の残る山林地区まで様々なものを兼ね備え、ひとつの街のようになっている。

日本政府による実験的な教育計画の一環で作られた学園であり、厳密な調査のもと入学を許可する生徒を決定し、日本中から優秀な人材をかき集めて運営されている。

……と、いうのが、表向きの情報だった。

「キエエエエエエエエエエ!!」

甲高い気合の声とともに振り下ろされる日本刀。

「死につつさらつせええええええええ!!」

燃え盛る炎をまとった音速の鉄拳。

「零れ雪ながれ氷霜柱!
詠みて凍えて搔き抜け!」

獲物を捕らえ貫かんと地を走る氷の薔薇。

「ほいつ」

手近に迫った氷の薔薇はリリティカの《禍の紡織衣》によつて動きを止めて。

「ザコがいきがつてんじやねーよ!」

その他襲撃者は、竜司が振るうアウスレーゼによつてあつけなく倒されていった。

今日から新学期。新しい学年で、新しい日々が始まる晴れやかな日だ。

かろうじて残る桜の花を眺めながら、竜司とリリティカは寮から綾神学園高等部に続く小道を歩いていた。襲撃者たちを片つ端から、ばつたばつたとなぎ倒しながら。

「うん。春休みは短かつたけど、なんだかこの登校風景も懐かしいねえ」

「そうだな……つくしゅ」

鼻をする竜司は、制服の上着を着ていなかつた。春先とはいえ朝はまだ少し肌寒く、シャツ一枚ではさすがに堪えた。昨日の集会が終わつてからすぐに学園本部まで制服の替えを申請したが、配給には早くても今日の放課後を待つ必要があるだろう。

「もし。新しいのをもらえるまで、なにか羽織つてくれればよかつたのに」

「パーク。学園では指定の制服かジャージしか着用を認めない、つて校則にあるだろうが」「りゅーくんはつくづく眞面目バカだよねえ」

「うるせえ。つてか、お前はいつまで朝飯食つてんだよ」

「え？」

食パンまるごと一斤を抱えて食べ歩いていたリリティカが、不思議そうに小首を傾げる。

「やだなりゅーくん。これは朝ごはんじゃないよ。デザートなの」

「たしかに食パン一斤に含まれる糖質はかなりのもんだ。だがな、それをデザートだと認めて

やる心の広さは俺にはない」

「うーん……りゅーくんは難しいことを言うなあ」

「朝から米三合炊いて、鍋いっぱいの味噌汁と二パック分の卵焼きを作らされる身にもなると
な、あれで足りねえのかつて腹が立つてくるんだよ」

「だつりゅーくんの作るごはんがおいしすぎるのがいけないんだよ！ おいしすぎて、余計

にお腹がへつちやうんだから！」

「つまりそうなると、もう絶食させるしか手はないのか……」

そんな仲の良いやりとりの最中も、二人は的確に襲撃者を倒していく。

制服を着た生徒や、スツツ姿の教師。はては一見普通のおばちゃんまでもが凄まじい異能の

力を揮い、竜司やリリティカを狙う。

「よいしょっ

「クソ弱えぞザコども！」

が、二人はそれらをすべて防ぎきり、なぎ倒す。

二人が通つてきた道は見るも無残に破壊され尽くされ、その端には点々と気絶した襲撃者が
倒れている。綾神学園医療班が倒れた彼らを肅々と回収するその横を、他の生徒たちがそし
らぬ顔で通り過ぎていく。

綾神学園の、いつも通りの光景だ。

「とーちやくっ！」

リリティカがぴょん、と跳ねて学園の門をくぐる。

竜司もその後に続き、普通に敷地内へと足を踏み入れた。

二人が学園の敷地に入つた途端、襲撃は嘘のよう無くなつた。取り囲んでいた者たちはそ
れぞれが得物を下ろしたり呪文詠唱を止めるなどして、後は何食わぬ顔で竜司たちと同じよ
うに門をくぐつて登校していく。

これもまた、いつも通りの光景だつた。

「校内戦闘は厳禁つて校則があるけどなあ……なんか拍子抜けだよな、この光景は」「えー。便利じゃないの、わたしたちにとつてはさー」

そんな話をしつつ二人はそのまま校内に入り、我が物顔で廊下を歩く。すれ違う生徒たちはそ
二人の姿を見つけるとほんの一瞬だけ体を強張らせ、すぐに視線を外して無視を決め込んだ。
綾神学園は中等部と高等部を併せ持つ、広大な学校である。「コ」の字型の左右対称な校舎

と、その中庭を隔てた向こうにある体育館とプール。それ以外にも雑多な建物を敷地内に併せ持つていて、教育施設としては申し分ない学園だ。

二人が向かうのは校舎の右側……高等部校舎。その一番奥に存在する高等部一年S組の教室だった。

教室の前にたどり着くと、中から何人もの生徒たちのざわめきが聞こえてくる。始業前の学舎としてはありがちな雑音。

それを聞き流しながら竜司はドアを思いつき開く。

「よーつす クラスマメイトの諸君。^{しょくくん} 竜司様とリリティカ様のおでましだぞー」

「おはようだよ、みんな！ 二年になつてもよろしくね！」

竜司たちが教室に入ると、途端にクラスの生徒たちが口を噤んだ。談笑を弾ませていた数人組も、一人静かに読書していた生徒も、誰も彼もが一様に竜司とリリティカに刺を含んだ視線を送り、身じろぎすらしなかつた。

しばし、教室の時が凍りついたかのよくな雰囲気が落ちる。

「おはよう二人とも」

息の詰まる緊迫感の中、一人の少年が竜司とリリティカに気安く声をかけてくる。

整つた顔立ちに人の良さそうな笑みを浮かべた、どこにでもいそうな普通の少年だ。体つきはどちらかといえば華奢な方だが、弱々しさを感じさせない強かさを内に秘めている。

狩獵において獣の足を捕らえるために用いられるはずの器具である。しかし出現したそれは足どころか胴体を切断しかねないほどの巨大さで、夜闇から鑄造したような不気味な色合

いもあつて処刑具めいた残酷さを滲ませていた。

「死んでくれるかな？」

「あはは、今日は元気そうだね。じゃあ早速……」

冬彦、と呼ばれた少年がぱちん、と一つ指を鳴らす。

すると竜司とリリティカを囲むようにして、漆黒のベアトラップが音もなく出現した。

「あれ？」

ベアトラップはそれでもなおギシギシと音を立て、竜司の手のひらに喰らいつく。骨すら断ち切るほどの途轍もない圧力だが、竜司の手の皮をわずかに傷つけることすら叶わなかつた。まるで子猫のじゃれる爪のようだ。竜司はその異形のトラップをあしらい、それどころか少しづつ押し返していく始末だった。

「さすがりゅーくん。わたしが『禍の紡織衣』を出すほどでもないねー」

「アトラップはバチンと大きな音を上げ、二人を真つ二つにせんとその刃を閉じ——

「悪いな、この程度じゃあ無理だ」

竜司の伸ばした両手で、左右の刃は難なく食いとめられてしまう。

ベアトラップはそれでもなおギシギシと音を立て、竜司の手のひらに喰らいつく。骨すら断ち切るほどの途轍もない圧力だが、竜司の手の皮をわずかに傷つけることすら叶わなかつた。まるで子猫のじゃれる爪のようだ。竜司はその異形のトラップをあしらい、それどころか少しづつ押し返していく始末だった。

「さすがりゅーくん。わたしが『禍の紡織衣』を出すほどでもないねー」

「やれやれ……そうだよねえ、この程度じゃあ殺せないか」

冬彦はそんな寒りのないせめぎ合いを見てため息をつくと、また指を鳴らす。すると漆黒のトラップは霞のようくに消え去った。

高等部二年S組学級委員長、冬彦——名字も二つ名も……彼には、存在していなかつた。

苦笑を浮かべる冬彦に、竜司はわざと挑発するように言う。

「初日から大層なご挨拶だな、冬彦よ。つーか校内では戦闘禁止だらうが」

「あの校則は校内設備の破損を禁じるためのものだらう。さつきの技は影でできているんだ。だから誰も触れないし、目標物以外を傷つけない。校則に触れずに君たちを攻撃できる、とても便利な能力なんだよ」

「ふうん。俺は気合入れれば触れたけどな」

「それは君くらいのものだつて。あーあー……別に本気じやなかつたけど、やっぱりちょっと悔しかなあ」

ぶつぶつとやるせなさそうに呟く冬彦だが、最後は諦めたように笑う。

「まあともかく、クラス代表宣戦布告はこれで終わり。今年度もよろしくね、竜司」

「ああ。よろしく」

そうして冬彦が差し出した右手を、竜司は力強く握り返した。

これで一段落、と思いきや見守っていた他のクラスメイトからは、野次のようなものが飛ば



される。

「ちつ……いい加減大人しく殺されとけよ、てめーら！」

「また毎日こいつらの顔を^{おが}押^{おお}まなきやなんねーのかよ」

「あはは！ ほんと、どの面下げて入つてくるんだろねええええ！ ぎやひやひやはは！」

「今日も可愛いよ、リリティカちゃん！ 僕は君を殺めねばならない運命を呪う……！」

「竜司君も結構可愛い顔してるとと思うけどなあ。殺せたら、私専用の抱き枕にするんだ♪」

いくつか変なものもあつたが、このクラスはこれで平常運転だつた。

半年前、この学園が始まつた時からクラスの顔ぶれはほとんど変わつていなかつた。

誰も彼もが得体のしれない強者のオーラと、痛いほどの殺氣を放つてゐる。

そんなクラスメイトたちを見渡して、竜司とリリティカは不敵な笑みを浮かべてみせる。

「そんじやまあ、今年も仲良く遊んでくれよな！ ザコの諸君！」

「あそんでねっ！ 弱^わっちいみんな！」

瞬間、野次が止み、教室に満ちた殺氣が膨れ上がる。

壁や天井に細かい亀裂がいくつも走り、空気が言い知れぬ閉塞感^{へいそく}を帯び始めた。

クラスの全員が、あらん限りの殺氣を込めた眼で竜司とリリティカのことを見つめている。

常人ならば一瞬で失神してしまいそうな威圧感^{うす}が渦巻く中、冬彦は呆れたように肩を竦めるだけだつた。

「まつたく、二人ともどうしてそういう挑発するような真似をするんだか」

「うるせえ。これが俺たちのやり方だ」

「はは、知つてるよ。ま、適度に頑張つてね」

そう言つて、ギスギスした空気をものとせず、冬彦は自分の席に戻つてしまつ。

冬彦は竜司たちの討伐^{とうば}に対するやる気がまつたくない、珍しいタイプの生徒である。そのモチベーションの低さゆえ、竜司たちは適度に談笑し合つ仲だつた。

（まあでも……敵に回すとわりかし面倒臭^{あき}そうだけどなあ）

とりあえず、竜司とリリティカも平然と自分たちの席に着く。

前年度から変わらない、窓際一番後ろの特等席だ。

竜司たちが席に着くとほぼ同時に、始業のチャイムが鳴り響く。

そして、教室前方のドアがガラつと開かれ。

「ふむ、朝から元氣のいいことだ」

昨日全校生徒の前で演説を行つた、化野早苗^{あだのひさなえ}が顔を出した。

「さあ、みんな席に着きたまえ。殺氣も抑えて。今日はH.R.の前に転人生を紹介するぞ」とすると、その言葉にクラスの生徒たちは虚を突かれたような顔をする。

「転人生……？ A組を飛ばしていきなりここ？」

「きひひ……骨のあるやつなのかナア」

竜司たちへの殺意も忘れてそんな会話を交わしながら、ざわつきつつも席に着いた。
かく言う竜司とリリティカも不可思議そうに顔を見合わせた。このクラスはS組。並はずれた実力者が集められたクラスである。どんな実力者であつたとしても、スタート地点はA組からと決められている。それをすつ飛ばしていきなりS組とは……。

「へー、一体どんな奴が——」

「《災厄の魔獣》!?」

悲鳴のよくな声で、誰かが自分たちの二つの名を叫んだ。

竜司が驚き顔を上げると、教卓の前に立っていたのは昨日助けた女子生徒だった。
ぼろぼろになつたはずの制服は新品になつていて、真新しい学生鞄を提げている。

女子生徒は信じられないものを見る目で竜司とリリティカを見つめていた。見知った顔に竜司は「へえ」と感嘆の声を漏らす。

「なんだ、昨日のドジっ子か」

「どつ、ど、どじつこおおおお!?」

おつと心の声が漏れてしまつた。

慌てて口を噤む竜司だが、女子生徒は目を吊り上げて名乗りを上げる。

「私には餡宮琴良っていう名前があるのよ！ 変なあだ名つけないでくれる!?」

「わかつたわかつた。悪かつたな、琴良」

「りゅーくんがごめんね、琴良ちゃん」

「待ちなさい！ なんでいきなりフレンドドリーなのよ!?」

「フレンドドリーってか、俺の『野々柳』って名字が微妙に呼びにくいけいか、知らない奴にも

下の名前で呼び捨てされることが多いんだよ。だから俺も初対面の相手は全力で下の名前を馴れ馴れしく呼び捨てすることにしてるんだ。よろしくな、琴良」

「わたしは下々のものとわけ隔てなく触れあうことで、心の豊かさを見せつける作戦だよ？」

「知らないわよ！ そんなこと！」

琴良と竜司たちのやりとりに、クラスメイトたちがざわつき始める。
そこに化野がごほんと咳払いして口を挟んだ。

「落ちつきたまえ、餡宮君。彼らは——」

「なんで《災厄の魔獣》が教室にいるんですか？ っていうか、どうして周りの人たちもこいつらと仲良くなつててるんですか？ おかしいじゃないですか、だつて……!!」

化野に真っ向から囁みつき、琴良はビシッと竜司たちを指さし叫ぶ。

「あいつらは世界の敵なんでしょう!?」

「君の言う通りなのがね。ともかくまあ、説明をするから落ちつきたまえ、餡宮君」

「ぐつ……うう……」

化野に言われ、琴良は肩をぶるぶると震わせながらもぐっと口を噤む。

しかしその間も竜司たちをキッと睨みつけ続けていた。敵意と殺氣と、あらゆるどす黒い感情がミックスされた痛い視線だ。竜司が爽やかな笑顔を浮かべてぐっと親指を立ててみせると、琴良の頬が思いつきり引きつった。狙い通りの反応だった。

その光景に化野はため息をつき、仕切り直しとばかりに琴良に微笑みかける。

「さて、飴宮君。改めて自己紹介しよう。私の名は化野早苗。この学園の教師であり、このクラスの担任だ。転入したてでこの学園のことなど、分からぬことだらけだろう。少しばかり講釈を行つても構わないだろうか?」

「……お願ひします」

むすっとした顔で答える琴良に、化野は満足げに頷いた。^{うなず} そうして教室中を見渡し言う。「二年S組の諸君らにとつては分かりきつた話だと思うが、ここは新たな同士のためにどうかするのなら、先ほど教室に入ってきた時の一悶着のようにもつといい場面がいくつもある。傾聴してくれたまえ。そして、竜司にリリティカよ……貴様らも今のような余計な茶々を入れぬようにな」

「はーい」

ジロリと睨めつける化野に、竜司たちは声を揃えて返事をする。事の渦中にいるのが自分のちであるとはいえ、ここで話を拗らせていいことは一つもない。化野やその他生徒たちを挑発するのなら、先ほど教室に入ってきた時の一悶着のようにもつといい場面がいくつもある。

「では何か話そうか……そうだな、まずは大前提からいこう」

化野はおもむろに右手人差し指を虚空に翳す。時を置かずしてその指には鮮やかな紅蓮の炎が宿り、やがてその炎は大きく燃え盛り、燐光をまき散らしながら化野を取り巻く渦と化す。紛うことなき異能である。だが、琴良はおろかクラスの誰もが驚愕の声を上げることはなかつた。この場の全員にとって、その程度のことは当然の光景だった。

化野はニヤリと笑みを浮かべ、決定的な言葉を告げる。

「この島にいるのは皆、異世界を救つたことのある英雄——《救道者》^{サブレス}である

何らかの事情によって異世界に迷い込み、異能の力を得て、その世界を救つたもの。綾神学園を有するこの島は、そうした特殊な事情を持った超人たちを集めの場所だ。化野の言葉に、琴良はおずおずと頷いてみせる。

「それは事前に聞いていましたが……本当なんですか?」

「もちろんだとも。この場の生徒諸君だけでなく、教員以外にも、公務員や食堂の調理士、学園併設研究施設や医療施設の職員などなど……とにかく、この島にいるのは《救道者》^{サブレス}だけだ。日本中からかき集め、今のところはざつと二千人ほど、といったところだろうか。君も昨

日の集会で見ただろう」

「めちゃくちゃな話ですね……」

地獄の業火を呼び出す魔女。

数多の聖なる剣を操る剣士。

雷の大槍を召喚する少女。

そんな枠外の人間たちがのべ二千人。この島に集結しているというのだ。ぼやく琴良は薄らと微笑みを浮かべてみせる。

「君の言う通り、めちゃくちゃな話だ。滑稽ですらある。だがな……」

「こうでもしなければ、我ら人類に未来はないのだよ」

「……」

さらりと重い言葉を突きつけられ、琴良は言葉を詰まらせた。

他の生徒たちも様々な反応を示した。ため息をつく者、目配せし合つて頷く者、肩を竦める者。それぞれの仕草が、化野の言葉を事実であると認めていた。

この学園は、単に『救道者』を集めるためにできたわけではない。己の技術をより高めるだとか、『救道者』たちの頂点を決定するだとか、そんな平和な理由でも決してなかった。

琴良はちらりと竜司たちに視線をやる。敵意にまみれていた先ほどとは異なり、その瞳は



不安でかすかに揺れていた。

肩を竦める竜司とリリティカを指差し、琴良は言う。

「あの二人……『災厄の魔獣』を殺すために、私たち『救道者』は集められた」

「そうだけど。ま、それだけが目的ではないのだがね」

「ともかく、あの憎き魔獣を討つ最大の好機なのだ。多少の無茶は止むを得まい。君もそう思

うだろう？」

「はあ……実は私、その魔獣についてよく知らなくて……」

「そうか。君は魔獣が暴れ始めた頃から最近まで、この世界にいなかつたんだつたな」

「ええ、ずっと異世界について……帰ってきたのは、ちょうど一ヶ月くらい前ですかね」

「歯切れ悪くそう言つてから琴良は眉を寄せ、不満げな顔を作る。

「ようやく家に帰つたと思つたら、堅苦しいスーツの人がやつてきて……気付いたら転入手続

きを進められて、この学園に連れてこられたんです。ほとんど説明もなく」

「手際の乱暴さについては謝罪しよう。だがまあ、我らもそれだけ『災厄の魔獣』に手を焼い

てているということさ」

化野が今度は右手で虚空を撫でる。

すると彼女の体を取り巻いていた炎が中空に広がり、仄白い幕と化した。

「『災厄の魔獣』とは、一年前、突如として東京に出現した最凶最厭の化けモノだ」

化野の言葉に応じ、炎の幕に映像が映し出された。

「東京、香港、ワシントン……三か月という短い期間の中で、数ある都市を無差別に襲撃し、この世界に壊滅的な被害を与えた。これはその、ほんの一例だ」

瓦礫の山から覗く人の手。

幾筋もの黒煙が立ち上る焦土。

ひどい怪我を負い血まみれで運ばれる人々。

そうかと思えば物々しい武装を行つた軍隊が、崩壊した街中を必死の形相で進む画像が映し出された。しかし画面を何か巨大な黒い塊が横切つた刹那の後には、それらの兵士たちは血溜まりの中に沈んでしまつていた。戦車もまるで玩具のようにひしやげている。血風と砂煙が混ざり合う不鮮明な映像。だからこそ映し出されるその悲劇が、一層際立つて演出されていた。

琴良は映し出されるその光景に見入り、思ひしげに唇を噛み締める。黙つて見ていた生徒の中にも、耐えかねたようすに目を伏せる者がいた。

「そして竜司たちはといえば、

「…………懷かしいなあ」

琴良は映し出されるその光景に見入り、思ひしげに唇を噛み締める。黙つて見ていた生徒の

まるで他人事であるかのように、小声で言葉を交わし合うだけだった。
おもおも
重々しい空気が流れる中、化野は右手を振って炎を消すと朗々と続きを語る。

「当時、最強クラスの『救道者』たちが全力を賭して『災厄の魔獣』に立ち向かつたが、まるで歯が立たなかつた。魔獣どころか、その手下ども——『災厄の牙』にすら太刀打ちできず、人類は世界が終わりゆく様を、ただ指をくわえて見ていることしかできなかつた。だが……」

「魔獣が現れて三ヶ月が経つたある日のことだ。突然、状況は一変する。その日東京で暴れていた魔獣が、何の前触れもなく謎の光に包まれ、姿を消した」

「…………は？」

化野の言葉に、琴良が目を点にする。しかし化野は気にかけることなく。

「そして、魔獣が消えた場所から二人の人間が見つかつた」

化野は竜司とリリティカを顎で示す。

「『災厄の魔獣』と同じ魂、同じDNA、同じ気配を持つあいつらが……な」

教科書でも読み上げるような平坦な口調で、そう言つてのけた。

「それ……本当の話なんですか？」

疑いの眼差しを向ける琴良に、化野は苦笑を浮かべてみせる。

「恥を忍んで言うが、魔獣討伐に当たるも成果を出せなかつた『救道者』…………その一人が私

教科書でも読み上げるような平坦な口調で、そう言つてのけた。

「それ……本当の話なんですか？」

疑いの眼差しを向ける琴良に、化野は苦笑を浮かべてみせる。

「恥を忍んで言うが、魔獣討伐に当たるも成果を出せなかつた『救道者』…………その一人が私

でね。私を含む計七名で此奴らを捕らえ、綿密な調査を行つた。その結果が黒だつた、といふわけだ」

化野は肩を竦めて竜司とリリティカを見やり、小さくため息をつく。

「私だつて信じられなかつたさ。だが元々魔獣自体めちゃくちゃな存在だつたんだ。ある時は竜だつたりある時は虎だつたりと姿を変えるわ、そこに在るだけで空間に影響を及ぼすわ」

「空間に影響？ どういうことですか？」

「『救道者』なんて夢物語の存在は、世界で一人か二人、出るかどうかの確率だ。だが、日本だけは異常な数の『救道者』を輩出している。これは最初に魔獣が現れたせいで、日本全国の空間が揺らぎ、時間軸を無視して異世界と繋がりやすくなつてゐるからと考えられてゐるんだ」

「まさか、私たちみたいな十代の『救道者』が多いのも……？」

教室を見回しおずおずと言う琴良に、化野は「そうだとも」と首肯する。

「魔獣発生時に近ければ近いほど、異世界に招かれる率が上がるらしい。だからこゝは学校という建前で作られているんだ。まあ、多数派に合わせたわけだな」

「もう、何がなんだか……でもそんなバケモノが、どうして今はこんな姿に？」

琴良の言葉に竜司がムツとする。

しかしすぐに氣楽そうな笑みを浮かべ、胸を張つて言つのだ。

「色々あつて魂たましが二つに分かれちまつたから、その辺に転がつてた死体二つに潜り込んで力

が回復するのを待つことにしたんだよ。なあ、リリティカ」

「うん。ちよーど、こんなイケメンと美少女がいて、超ラッキーだったよねえ」

「そ、そ、そ、う、よ、か、つ、た、わ、ね」

琴良は一人の氣楽なテンションに戸惑い眉を顰めるが、化野は氣にすることなく語る。

「そんなわけで、捕獲したこいつらを封じ込める檻カageか、処刑する場所として、綾神学園が始動した。今から半年前のことだ。こいつらが出てからは手下の『災厄の牙』どもも姿を消し、私たち『救道者』たちは心おきなく、この二人を葬り去ることに専念できていると

いうわけだ。……未だに成果は芳しくないがな」

自虐氣味に言い放ち、化野は口の端を持ち上げぎこちない笑みを浮かべてみせた。そうして

琴良に向き直ると毅然と背筋を正す。

「飴宮君。この学園の目的は、大きく分けて三つある。一つ目は、この地球にごくまれに現れる異世界からの侵略者を討伐すること。二つ目は行方知れずの『災厄の牙』を探し出し討伐することだ。まあ、これらは『救道者』の中から有志たちが主に任務に当たってくれている。だから、君がまず考えるべきことは三つ目の『災厄の魔獣』討伐。これだけだ」

「はあ…………」

琴良は気乗りしないような生返事をするだけだった。

しかし化野はそれに不快な顔をするでもなく、淡淡と次の言葉を紡ぎ出す。

「だから、卒業するその日までよろしく頼む」

「…………はい」

化野が続けた言葉に、琴良は重々しく頷いた。黙して耳を傾けていた他の生徒たちも、同じように息を呑む。

卒業。この普遍的な言葉が、この学園では、『救道者』にとつてはとても重い。真剣な顔をしていた琴良だが、ふと何かに思い当たつたよう眉を顰める。

「…………で、今の説明を踏まえた上で、どうしてその『災厄の魔獣』が学校に通っているんですか？」

「なに、簡単な話だ」

化野は眼鏡を持ち上げ、平然と言う。

「ここが日本領土である以上、教育を受ける義務はあいつらにも存在するだろう」

「あいつらは日本人じやなくて、世界に仇なす敵なんですよ！」

琴良のツッコミに、生徒たちの大半が真面目な顔でうんうんと頷いた。

化野は肩を竦めるだけだった。

「まあ、義務云々は建前で、本当は日常の中で殺す機会を窺つてもらおう、という学園理事

長の意向だ。あいつらがヘタに引き籠もれば、我らに殺すチャンスなど皆無だらうからな。衣食住の保証をするかわりに、就学などなどの義務を課している」

「茶番にもほどがあると思うんですけど……!!」

琴良の悲鳴のような声に、生徒たちだけでなく竜司とリリティカも納得の面持ちで頷いた。

たしかにおかしな話だと思う。《救道者》たちの学舎に通う世界の敵。

だが竜司たちは化野に言われた通りに茶々を入れることなく、しつとした態度でその話を聞いていた。

「まあ、堅苦しい説明はこの辺でいいだろう。そろそろ餞宮君の紹介といこうじゃないか」

「はあ……」

化野の言葉に、琴良は渋々といった様子で頷いた。納得できなさそな顔である。

しかし化野は満足げに微笑み、緩んだ空気を跳ね飛ばすかのように手を叩いた。教卓の前に立つて注目したクラスの生徒たちを一人一人見回してから、琴良を示して語りかける。

「さて、先ほど諸君らが驚いたのも無理はない。S組への一発編入など、これまで前例のないことだ。だが彼女はそれに見合うだけの実力を有しているがゆえ、今回だけ特例が認められた。

何しろ彼女は七つの——」

「ツツ、先生！」

その声を遮って、琴良が突然大声を上げる。ざわり、と教室中が揺れる中、琴良はほんの

少しだけ目を吊り上げ、不服そな面持ちを浮かべて言う。

「私が……自分で自己紹介します」

「ほう、そうかね。ではどうぞ」

さつと化野が脇に退き、教卓の前には琴良だけが残される。生徒たちが首を傾げて見守る中、琴良は深呼吸してから教室の中を見回した。

そして言う。決定的な言葉を。

「名前は餞宮琴良。救った世界の数は……六つよ」

「なつ!?」

その言葉にクラスメイトたちは全員が揃って絶句する。

彼らは異世界に呼ばれ、異能を得て、その異世界を救つた。

「なんつ……」

「すごい……ねえ」

だからこそ知っている。

一つの世界を救うことが、一体どれだけ血のにじむ努力を必要とすることなのかを。

複数の世界を救つた《救道者》の前例はいくつもあり、この学園の生徒の中にも幾人か存在している。しかし、その中でも琴良の告げたその数字はあまりに異質なものだった。

竜司とリリティカも複雑そな面持ちでそつと目配せし合い。

「ふむ……」

そして化野は琴良のことを、少しだけ不思議そうな目で見つめていた。

緊迫感の満ちる中、琴良は続ける。決意のようなものが込められた、強い口調で。

「ぶっちゃけて言うと、私はこの『災厄の魔獣』退治自体に興味はないの。それが力を持つた者の使命だって理解しているから、拒否するわけじゃないけど……でも、本当の目的はまったく違う」

言葉を切ってしばし沈黙し、やがてきっぱりと言い放つ。

「私は……炎を纏つた剣を持つ、とある『救道者』を探しているの。それがここにきた最大の目的よ！」

二章

鮎宮琴良という《救道者》サブレス

琴良の自己紹介が終わってからはH.Rとなり、昼前には解散となつた。

緩やかな空気が流れる中、待つてましたとばかりに竜司とリリティカは琴良の机に集つて話しかける。

「なあなあ。琴良って本当に六つの異世界を救つたのか？」

「がんばったんだねえ。もしかして学園での公式最高記録じゃない？」

「記録なんてどうでもいいわ」

帰り支度を済々とこなしつつそつけなく答え、琴良はじろりと二人を睨みつける。

しかし竜司は変わらぬ調子で軽く話しかける。

「ま、そんじやその冒険譚について詳しく聞かせてくれよ」

「はあ……？」

「いや、なんか俺、お前に会つたことある気がするんだよね。昨日の集会の時じゃなくて、

もつと前にさ」

「ちんぶ

「何よその陳腐なナンパ台詞」

琴良は思いつきり眉を顰め、あからさまに不快そうな顔をする。

「変なことを言うのはよしてくれるかしら。あんたに会ったのはこの島にきて昨日が初めてよ」「いやマジで。だからそういう縁も含めてさ、頼むこのとーり！」

手を合わせて頭を下げる竜司に、琴良は眉を顰める。

そしてついつと顔を背けて言うのである。

「何と言われようと、嫌に決まってるでしょ。どうして敵であるあなたたちなんかに……」

そこで琴良はハツとしたように竜司たちに視線をやり、忌々しげに言う。

「さては敵情視察……つてところかしら」

〔ご明察〕

琴良の言葉に、竜司は顔を上げてニヤリと笑つてみせる。

そうして腕を広げて語り上げるようにして言うのである。

「六つの世界を救つた《救道者》様ときちや、俺たち《炎厄の魔神》の邪魔になることは間違いないからな。早めに対策を考えた方がいいかと思つたわけよ」

〔だからって私本人に直接聞く？〕

ほんの少し眉根にしわを寄せてぼやいてから、琴良は真摯な顔で竜司に向き直る。

「まあいいわ、私も丁度あんただちに聞きたいことがあつたの。それに答えてくれるなら、一つだけ質問を許そうじゃないの。どうぞ？」

「はいはいはーい！」

リリティカが元気よく挙手する。

「琴良ちゃんって、どんな能力を持つてるの？」

直球の質問に琴良は真面目な顔のまま。

〔剣よ〕

たつた一言短くそう答えるのだ。

シンプルイズベストといったその回答に、リリティカは唇を尖らせる。

「剣だけじゃあ分からないよ。炎を出したり、雷を撃つたりとか、そんな派手な技はないの？」

「そんな技があつたとしても教えないし、質問は一つまでつて言つたでしょ」

〔ぶうー。ケチいー〕

「なんとでもおっしゃい」

むくれるリリティカの恨み言を、琴良は平然と流すのだった。

剣技だけ、とは《救道者》まみれのこの島では何とも地味な能力である。しかし。

（單純に剣だけで強いとか……これは厄介な相手になりそうだねえ）

（まったくだ……）

実のところ竜司とリリティカにとつては、一番厄介な能力でもあった。

目配せし合つ竜司たち。琴良はそれを気にかけるそぶりも見せず、小さくため息をついて言う。

「それじゃ今度は私の番ね」

「しかたないなあ。じゃあ、どうぞ」

リリティカが発言を促すと、琴良は何度か深呼吸して息を整え、まっすぐ竜司たちを見つめて尋ねる。

「あんたたち、炎の剣を持つた《救道者》に心当たりはない?」

「え?」

それに、竜司とリリティカは同時に疑問の声を上げ、顔を見合わせるのだった。

炎を纏つた剣を持つた《救道者》というのは、先ほど琴良が自己紹介の時に話していたものだろう。それは分かるのだが、てっきり自分たちについて質問が飛ばされるとばかり思つていのので、少々驚いてしまう。

目を点にする竜司たちに苛立つてか、琴良が声に棘を含んで言う。

「何よその反応は。文句もあるって言うの?」

「いや別に……えーっと、炎の剣士かあ」

竜司は腕を組んで考え込み、やがてぱつりと告げる。

「心当たりがないわけじゃないけど——」

「なんですか!」

そんな曖昧な返答に、琴良は一瞬で食いついた。

竜司の襟首をひつつかみ、ぐぐつと目をつり上げた鬼気迫る顔を近づけてくる。
 「お、おとなしく教えなさい! 喫らないつもりなら、こっちにも考えがあるわよ……!!」
 「いや別にすんなり答えてやるつもりだけど。探してるのは具体的に、どんな奴なんだ?」「どんなつて……」

竜司の問いかけに、琴良は途端に口こもる。

そして顔をしかめて目を逸らし、絞り出すようにして言う。

「顔は分からぬのよ。日本出身の《救道者》で、そんなに体は大きくなくて。剣は……」

そこで琴良はちらりと竜司の顔を見やり。

「あんたのバカでかくて不気味な剣とは似ても似つかない、普通サイズの綺麗な銀色の剣よ。それに炎を纏わせて戦う、とびつきり強い人。これくらいしか分からぬのよ」
 「漠然としてるなあ。なあ、リリティカ。炎の剣士、ここに何人いたか覚えてるか?」「そうだねえ」

竜司の問いかけにリリティカは首を傾げ、ややあつてあつけらかんと。

「たしか、三人じゃなかつたかなあ」

「それくらいなら余裕で調べられるわ!」

たしかにこの広い島の中とはいえ、日星のついた三人程度なら調べ上げるのは容易だろ。だがしかし、そう簡単にいかないことを竜司は知っていた。

お節介だと理解しつつも、やんわりと琴良に忠告する。

「いや、無理だと思うぜ？」

「どうしてよ」

「だつてお前。三人つて、このクラスだけでも三人いるつてことだからな？」

「…………は？」

途端、琴良の顔色はすつと蒼白になるのだった。構うことなく竜司は続ける。

「炎の剣なんてオーソドックスな能力を持つた奴なんか、この島にごまんといいるからなあ」

「あ、やっぱりこのクラスだと四人かも。たしか早苗ちゃん、剣も使えたはずだから」

「まあ、実際はもつといるんだろうけどな。切り札として隠されてるとわからんねーし」

ひどくあつさりとした二人のやりとりに、琴良は呆然と言葉を失くしたままだつた。

ひとクラス中に四人。もしくはそれ以上。

そうなると二千人の中には一体どれだけの該当者がいるのか。

簡単な算数の問題すら拒絶するかのよう、瞬く間に琴良はどんよりと沈んでしまう。

竜司はその肩を叩き、明るく励ましてやるのだが。

「ま、気にすんよ。総当たりで強い奴を探していけばそのうち見つかるつて」

「つ…………るさい！ あんたなんかに言われなくともそつするつもりよ!!」

「あーはいはい。そうつすつか」

囁かずつくように言われて、竜司は肩を竦めて返すだけだった。

まだまだ聞き足りない部分もあるが、どうせ毎日のように教室で顔を突き合わせることになるのだ。これからいくらでもその辺は探ることができるだろう。

救道の真上にかかつた時計を見上げると、その針は正午を少し回っていた。

竜司はリリティカに目配せし、いそいそと帰る支度を始める。

「そんじや、俺たちはこれから昼飯に行くとするか」

「うん！ ごはんだごはんだー！」

目を輝かせ、リリティカもそれに倣つて鞄を片付ける。

その様子を見て、琴良が眉を顰めて尋ねてくる。

「お昼ご飯つて……あんたたちもまさか食堂で生徒たちに混じって食べたりするの？ それはなんだかぞつとしない光景ね……」

「ううん、晴れの日は大体お外の特等席で食べるんだよー。いいでしょ？」

「別に」

リリティカにそつなく返す琴良だった。

おかげで竜司は苦笑する。たしかに、それほどの条件でもない。

「ま、特等席は特等席だが、自慢するほどのもんじゃねえわな」「でもでも、りゅーくん。あそこ、景色はいいでしょ?」「景色が良くてもなあ」

竜司は気力なくぼやく。

「殺されかけると、ゆっくり飯も食えねえだろ」

「……は?」

それに、琴良が目を点にするのだった。

殺される。どう考へても昼時に聞く単語ではないだろう。

だが、事実なのだから仕方がない。

「あんたたち……ご飯に行くんじゃないの?」

「飯に行くぜ? ただその飯時に、俺たちは屋外の広い場所で待機してなきやなんねーの」

「そこでご飯を食べるわたしたちを襲撃するのが、みんなの日常なんだよ」

昼食時、竜司たちは学園校舎の外に出て、《救道者》たちを待ち構えねばならない。

学園校舎内での戦闘は厳禁だが、外で暴れる分にはほぼ制限がないのである。

そのために、『災厄の魔獣』は昼食時や放課後は屋外で待機すべし』という校則があるくらいだ。まあ、それを守っている内は衣食住がある程度保障される約束なので、竜司たちにもメリットがないわけではないのだが。

そんな説明をおおまかにしてやると、琴良は苦虫を嚙み潰したような表情を浮かべる。

「ほんと、茶番ばっかりね……うん?」

そして何故か深刻な表情で押し黙り、ぽつりと尋ねてくるのだ。

「今から強い奴が寄つてたかって……あんたたちを殺しにやつてくるの?」

「だからそう言ってんだろ」

「…………わかつたわ」

琴良はそう言つて、素早く自分の荷物を片付ける。

そして、とびつきりの笑顔を竜司たちに向けてきた。

予期しないその行動に竜司が眉を顰めた瞬間。

「特別に……私もそのお昼ごはんに付き合つてあげるわ!」

「……は?」

琴良はそんな宣告を放つのだつた。

それから二十分ほどして竜司とリリティカ、そして琴良の三人は小高い丘にやつてきていた。綾神学園の校舎の裏手にある場所だ。あたり一面短い芝生が広がつていて、少し行けば芝生は途切れ砂浜となり、青く澄んだ大海原が見渡せる。波の音と海鳥の鳴き声が聞こえてきて、

かすかな風も吹いている。

昼食を取つたり、散歩したりするには最高のロケーションだ。

だが、眺める限り、人影は他にひとつも見えなかつた。

「こんなに最高の場所なのに……どうして誰だれもいないのかしら」

竜司たちから少し離れた芝生に腰を下ろした琴良が、そんな疑問をぽやいた。

「竜司とりリティカは顔を見合わせ、なんでもないことのように答える。

「そりやまあ。ここは俺たちの特等席みたいになつてるからな」

「挑戦する人たちしかやつてこないの。静かでいいよねー」

「つまりプライベートビーチつてことじゃない。『災厄の魔獸』のくせに……」

「いいじゃねえか、資源の有効活用つてやつだ。つてかお前なんでついてきたんだよ。さつき

の話聞いてたろ。これから強い奴らが——」

「ふふん」

竜司の諫めるような言葉を遮り、琴良は鼻を鳴らす。

「言つたでしょ、私の探してた炎の剣士もどんでもなく強い人なの。もしかしたら、あんたたちを倒すためにやつてくるかもしれないでしょ。それを待ち伏せするのよ」

「ええー……」

それによりリティカが不満げに口を尖らせる。

「つまり、わたしたちをエサにするつてこと？」

「そういうこと。だから馴れ合つつもりはないわ」

そつけなく言い放つと、琴良は竜司たちに背を向けてサンドイッチに齧りつく。

ここにくる途中にあつた売店で、琴良が入手したものだ。

売店、とはいうものの、この島では食堂を利用したり、店で買い物をしたりするのに現金を必要としていない。誰もが『災厄の魔獸』の討伐という使命のために集められているので、衣食住の保証はもちろんのこと、学費も免除で、あげくの果てに月々の給料までもが発生する。

「まったく大盤振る舞いありがたい待遇だわ。『災厄の魔獸』様様ね」

当てつけのようになつて、琴良の顔は、少しだけ浮かないものだつた。

琴良がパクついているのは、ハムと卵のオーソドックスなサンドイッチ。

それとパックのコーヒー牛乳。

以上が今日の琴良の昼食だつた。売店には他にも色々と置いてあつたらしいが、琴良が覗いだときには生徒たちによつてすでに根こそぎ持つて行かれた後で、ろくなものが残つていなかつた。

「味気ねえ食事だなあ。育ち盛りにそれだけで足りるのか？」

「うるさいわね！ 放つておきなさいよ！」

竜司のツッコミに、眦まなこを吊り上げて睨み返す琴良だつた。わりと団星だつたらしい。

しかしそう言われてしまえば放つておく以外に道はない。竜司とリリティカは小高い丘の一番上、ベストな場所にレジャーシートを広げ、自分たちも昼食を取ることにする。

竜司がシートの上に並べた本日のメニューを見て、リリティカが目を輝かせて歓声を上げる。

「わあい！ 今日もわたしの好きなおかずばかりだ！」

「お前に嫌いな食いものなんてねーだろうが。ほら箸。あとこれ取り皿な」

「ありがと！ それじゃ、さつそく……いつだつきまーつす！」

言うが早いか、リリティカが化けモノじみたスピードで箸を巧みに操つて、おかげを駆逐していく。それを、竜司は水筒の茶を飲みながらまつたりと見守る。

まるで運動会にはしゃぐ子供と、それを微笑ましく見つめる母親の図だった。

（……深く考えないようにならう）

自分の在り方に疑問を持つ竜司だが、すべては今更である。

半年前からずっと変わらない日常風景に、竜司は心安らいでいたのだが――。

「なんだよ 琴良」

「いや、その……」

琴良が信じられないものでも見るような目で、竜司とリリティカのことを見つめていた。視線を泳がせながら、琴良はおずおずと尋ねてくる。

「あんたたちそれ……なんなの？」

「い、いや、その……」

「弁当だけど？」

「二人分のお弁当の量じゃないでしょ……」

「ふいふもふおーあお？」

口いっぱいに食べ物を詰めこみ、もぐもぐと答えるリリティカだった。

竜司とリリティカが聞んでいるのは、特大の重箱三段分だ。

三角おにぎりに、いなり寿し。からあげ、海老フライ、肉団子、春巻きに昆布巻きなどなど。それらに加えてプロッコリーやミニトマトが色彩を考え、脇には別のパックに入つた毒とオレンジ。栄養バランスを考え、さらに満足感をこれでもかと追求した充実ぶりだった。

（でもそんな荷物、ずっと持つてなかつたわよね。どうしたのよ）

「ああ、荷物になるから朝一番でここに置いてきてたんだよ」

「わたしたちのことはなんだってみんな分かつてたから、誰もイタズラしないんだよ！」

「琴良も食うか？」

「おいしいよ？」

「結構よ。敵から施しは受けない主義なの」

竜司たちからの申し出を、まさりと流す琴良だった。

（……。だが残念なことに……）

（……。言い分けはクールだ。だが残念なことに……）

「（……。）」

「ちつ、違うわ！『災厄の魔獸』のくせしていい物食べてて腹が立つのよ！」

琴良は今度こそそっぽを向いて、コーヒー牛乳をすり始める。

その背中には、妙な哀愁が漂っていた。

素直じゃないなあ、と苦笑する竜司の隣で、リリティカがからあげを摘んで一口齧り、ぽつりと言う。

「りゅーくんの作ったごはんは最高なのになあ」

「ぶうつ!?」

琴良がコーヒー牛乳を思いつきり噴き出した。

げほげほと呟るその背中に、竜司は眉を顰めてみせる。

「なんだよ急に」

「あ、あんたそれ……全部自分で作ったの!?」

「そうだけど？」

「自慢の主夫だよ！」

「誰が主夫だ誰が」

竜司は肩を竦めながら、「仕方ないだろ」とばやく。

「どうだけど？」

「自慢の主夫だよ！」

「誰が主夫だ誰が」

「他人に作つてもらつた飯なんかどうせ毒まみれなんだ。効きはしないがいい氣もしない。だからなるべく自炊してんだ」

「はあ……ほんつとなくましい奴らね」

「ま、食料なんかは困らねえし、掃除に洗濯だって共同でやつてる。問題ないさ」

「世界の敵がこんな所帯じみた奴だなんて……うん？ 洗濯……？」

琴良は急に口を噤む。

そうして何かを思い出すように、眉の間にしわを寄せたかと思えば。

「……………ツッ!?」

突然弾かれたように飛び上ると、ごそごそと自分の鞄を漁り始めた。

その急な反応に竜司とリリティカが首を傾げて見守る中、琴良は平たい包みを取り出して、それを竜司に突きつける。何故か恥ずかしそうに頬を染め、口をへの字に曲げている。

わけの分からぬ竜司は肩を竦めて琴良に問いかける。

「あ？ なんだこれ」

「なつて……あんたの上着よ」

「……………え？」

「色々あつて、すっかり忘れていたわ。昨日貸してくれたでしょ」



竜司だけでなく、リリティカまでもが口を開いたまま、信じられないものを見る目で固まってしまう。

そんな二人の反応に琴良は一瞬だけ言葉に詰まり、しどろもどろに弁明を始める。

「な、なによ、その目は！ ちゃんと洗濯して、アイロンだつてかけたわ。文句あるの?!」

いやその……ないところか……うん

気圧されるように、竜吉は包みの中身を確認するそこには確かに制服の上着が入っていた。

色は黒。学園の中でのこの色を着ているのは竜司だけである。何しろこの色は、一般的の生徒と『災厄の魔獣』を区別するべく試された特別製なのだ。リリティカも元は黒い制服が別に用意されていたのだが、『かわいくない!』と突っぱねて勝手に普通の女子用制服を着ている次第である。特にこだわりのない竜司だけが、黒い制服を着用していた。

「でも昨日……返さなくていいって言つたよな？」

おずおずと竜司が言うと、琴良はほんの少しだけきょとんと目を白黒させる。

「そういえば言つてたような気もするわね。でも、借りたものは返す。当然のことぢょ?」
「お、おう」

琴良の平然と語る正論が、竜司の頭をガツンっと殴りつけた。

その横から、声を潜めてリリティカが告げてくる。

(火薬とか、毒の臭い、変な魔術の類、その他もろもろ……一切怪しいところがないよ……
琴良ちゃん、ほんとにただ返してくれただけみたい)

(ええええ……マジか)

アイロンをかけたという琴良の言葉通り、目立つたしわも見当たらない。おずおずと袖を通じてみると、普通に着心地がよかつた。

怪訝な顔をする竜司とリリティカを前に、琴良はムツとしたような顔をする。

「なによ、これだけじや礼にならないとでも言いたいの?」

「いやそうじやなくつて……俺、『災厄の魔獸』で、お前の敵なんだけど……どうしてここまでするんだ?」

「たしかにあなたたちは敵かもしれない。でも、昨日のあなたが私を助けてくれたのは事実でしょ? 私はね、借りは絶対に返すようにしているの。その相手が『救道者』だろうが『災厄の魔獸』だろうが関係ないわ」

「はあ……」

有無を言わせぬ強い口調でそつ断言されると、竜司は言葉を濁すしかない。

思わず顔を背けてリリティカとこつそり目配せし合う。

(変わった奴だな……)

(まじめさんだねえ……)

竜司たちに対する、その他『救道者』たちの態度はおおむね淡白なものだ。

それは敵同士である以上仕方のないことだし、また当然のことである。だからこそ、その立場の違いを『関係ない』と断言する琴良のことが奇妙なものに感じられた。

(いやまあ……別に嫌いやねえけどな)

複雑な心中を誤魔化すべく、竜司は揶揄するような口ぶりで琴良に言う。

「はは、クソ面目なこつた」

「なんともも言うがいいわ」

それに琴良はつんと澄ました顔をして胸を張る。

「これが私の生き方なの。誰に何と言われようと絶対に曲げないわ。七つの世界をめぐる間に学んだ、大切なことだもの」

「うん?」

「え?」

「七つ?」

「お前、救った世界は六つとか言つてなかつたっけ?」

途端、琴良の顔色が真っ赤に染まる。

顔を見合わせる竜司とリリティカ。

微妙な空気が流れる中、琴良は裏返った声で取り繕うように叫ぶ。

「ううううう、うるさいっ！ 六つよ！ 救つたのは六つの!!」「どういうことだよ」

「琴良ちゃん、もしかして算数苦手なの？」

「数くらいちゃんと数えられるわよ！ バカにしないでくれる!?」

らくするとしゅんと沈んでしまう。

そして、観念したようにぽつりと言うことには。

「笑いたきや笑いなさい……私は、失敗したのよ」

「あ？」

「え？」

「私は……最初に招かれた異世界を救えなかつたの」

そこから琴良は、観念したように自身の苦い過去を語るのだ。

『こんなはずじゃ……なかつたのに』
闇の渦巻く高い塔の頂上で、琴良は唇を噛み締めた。

目の前には、一人の男が舌舐めずりをして琴良のことを見つめていた。

人の形をした、されど人ならざる者だ。優然とした風貌だが、その肌は病的に白く、また愉悦の形に歪められた口元からは、ぬらりと光る牙が覗いている。細められたその赤い瞳に浮かぶのは、嗜虐と侮蔑の入り混じる、どす黒い感情だった。

この男が、この世界……レルニルを手中に収めんとする吸血鬼族の悪しき王。

そして、琴良が討つべき敵だった。

聖剣に選ばれし者として、琴良は異世界レルニルに招かれた。

そこで琴良は旅をして腕を磨き、仲間を集め、ついに最後の戦いに臨んだのだった。

神の化身とされる聖剣クラウソサスを得て、さらにその最終奥義も会得した。

琴良と仲間たちは完全の状態で敵の居城に乗り込み、破竹の快進撃を見せつけ……。

その結果、惨敗を、喫してしまった。

王はあまりに強かつた。

琴良たちの攻撃は見えない障壁に阻まれ一切通じず、桁違いの魔力によつて繰り出される様々な魔法によつて、一人、また一人と仲間たちが倒されていった。最後に残つた琴良もまた王にろくなダメージを与えることも叶わず、ただ勝り殺されるためだけに、気力だけで立つているような有様だった。

「私の目の前に、その人が現れたの」

琴良の目の前に、いつの間にか人影が立っていた。

一枚のぼる布を頭から被つただけの、大柄でも、小柄でもない人影。

手には燃え盛る紅蓮の炎を宿した、美しい銀の剣。

そしてその人影は、驚く琴良に目もくれず、たつたひと振り。上段から浴びせた、その洗練された一刀のあと、琴良に迫っていた魔力の塊ごと王を斬り捨ててしまった。

王の断末魔が轟く中、啞然とする琴良に、その人影は振り返ることもなく。

『悪いがこの世界……俺が救わせてもらったぜ』

それは琴良が異世界に招かれて以来久々に耳にした、地球の、日本の言語だった。

たしかにそう言つたのだ。

「…………うーん」「…………にやはーあ」

琴良の告白に、竜司とリリティカが気の抜けた声を上げた。

それに琴良はムッと顔をしかめてみせる。

「何よ、夢でも見たんだろうって言いたいの？」

「いんや。うん。多分違うから……うん」

「??」

頸垂れてしみじみと呟く竜司に、琴良は不思議そうな顔をする。

そこにリリティカが慌てたように口を挟んだ。

「そ、その助けてくれた人は、それからどうしたの？」

「……ちゃんと顔を確認する前に、また気付いたらしくなっていたの。仲間たちはみんな気を失っていたものだから、誰も信じてくれなかつたわ。おかげで手柄は私のものになって、私はそこの世界では救世主として有名なのよ」

誇らしいはずのその言葉を、琴良は苦々しい口調で語つた。

だが最後には強い笑みを浮かべてみせる。

「でも、この島に招かれたのは幸運だったわ。この島にはすべての《救道者》が集められているんでしょ？ 私を助けてくれたのも、十中八九《救道者》だわ。あの人もきっとこの島のどこかにいるはずなの」「なるほどなるほどー」

リリティカがうんうんと食い気味で相槌を打つ。竜司も顔を上げ、呆れた調子で問いかける。

「つまりお前はそいつを探し出して借りを返したいんだな？ なんとも『苦勞なこつた』……はある？」

その言葉に琴良は目を丸くする。そしてその顔は次第に、ありありとした不機嫌色に染まつていくのだった。

竜司が疑惑を抱く中、琴良は思ひしげに口を開く。

「なんでそんな発想に至るわけ……？」

「え、だつてお前ってかなり義理堅い方じやん？ 俺にだつてきちんと筋を通しててくれるし」「それとこれとは話が違うわ！」

力強く言い放つ琴良だった。

その目には根強い怒りだか恨みだかの真っ黒い炎が宿っていた。

ぎゅっと握った拳を天に掲げ、琴良は吼える。

曰く。

「私はその炎の剣士を見つけ出して……、発ぶん殴つてやりたいだけよ!!」

「なんでっ!?」

予想外すぎるその言葉に、竜司とリリティカがそろつてツッコミを入れる。琴良はそれに大

真面目な顔で答えるのだ。

「だつてあの世界を救うことは私の使命だったのよ？」

それなのに横取りされて、不完全燃

焼つたらいいわ」

「いやでも……そいつが現れなきやお前、結構危なかつたんじゃねえの？」

「ご心配なく。劣勢をひっくり返せるような切り札ならあつたの。だからこそあんな場面で邪魔されて……本つつ當に最つ悪なのよ!!」

心底不本意だとばかりに眉を顰め、琴良は握りしめた拳をわなわなと震わせる。

「私は手柄を奪つたそいつを探し出して、一発殴つて……あの時助けてもらわなくとも十分勝てたつてことを、嫌というほど分からせてやるのよ……ふ、ふふふ……泣いて謝つたつて許さ

ないわ……気が済むまで私の強さを思い知つてもらうんだから」

殺意全開の微笑みを浮かべる琴良だった。世界を救つた英雄というよりも、そこにはいるのは単なる復讐鬼のようである。

竜司とリリティカは冷や汗をダラダラと流しながら、こつそりと目配せし合う。

そして竜司はぎこちない咳払いをして言う。

「え、えーっと……だつたら聖討会に当たりをつけてみるのが一番の近道かもな」

「……せいとうかい？ 生徒会じゃなくて？」

聞き慣れない単語らしく、琴良は殺意を潜めて首を傾げる。

それに竜司は淡々と説明を行うのだった。

「う、うん。一種の部活とか、そんな感じだよ。腕に覚えのあるひとが集まって、色々な仕事をしてゐるよ。逃げちゃつた『災厄の牙』を探したり」

「ああ……化野先生が言つていた有志つてその人たちのことなのね。うんうん。強い『救道者』^{サブレス}が集まつてゐるのなら、あの人もその中にいるかもしねないし、所属していなくても、噂くらゐは聞ける可能性があるわね」

琴良は目を輝かせて一人の話に食いついてみせる。

だが、竜司は「でも一筋縄じやいかないだろうな」と苦笑する。

「『救道者』^{サブレス}には個人プレイを好む奴が圧倒的に多いからさ。バカみたいに強いくせして、聖討会に所属してない奴も結構いるんだわ。ま、とりあえずそこの百難会長にでも聞いてみろよ。『原初の七人』の一人さ」

「げん……何よそれ」

『災厄の魔獸』^{エンボリオ・イーター}に挑んで俺たちを捕獲した、最強クラスの『救道者』^{サブレス}。化野先生とか、あとこの学園長とかがそうだぜ」

「へえ……まあ、何にせよ手掛かりにはなるわ。もつとその聖討会について教えなさいよ」

「おう、いいぜ。ちょうど——」

刹那、場に走るのは、純然たる殺氣^{さつき}だった。

言葉を切り、竜司は動く。

リリティカと琴良の二人を瞬時に小脇に抱え。

「ちよつ! 何するのよ!」

琴良の抗議の声にも構うことなく、助走もつけず、地面を力一杯蹴りつけて鉛直方向に高く跳躍する。風を切つて舞い上がり、やがて百メートルほどの高度に到達したその瞬間。三人の元いた場所が火山のようになに爆発した。艦樓^{ぱる}と化したレジャーシートの残骸と舞い上がる砂塵^{さじん}が竜司たちの高度まで届き。琴良が小さな悲鳴を飲み込んだ。

竜司が目を凝らすと、土煙^{つちじみ}の向こうにそこに微かに二つの人影が見えた。小さく揺らめく二つの影は言いしれぬ不気味さを湛えている。

そのあとは重力に従つて自由落下だ。

体制を崩すことなくまっすぐ落ちる竜司に向けて、琴良が声を張り上げる。

「何! 一体何事なの!」

「多分、あれが聖討会の奴らだよ」

「いつもいつも、ご苦労さまだよねー」

問一髪、重箱を片付け抱えて守りきつたりリリティカが、気楽そうに呟やいた。

「よつと」

竜司はリリティカと琴良を抱えたまま、元いた場所から少し離れた地面に難なく足から着地する。

その頃にもなれば土煙も次第に晴れていき、現れた敵の姿をようやく辨むことができる。

敵は二人。綾神学園の制服に身を包み、そろって竜司とリリティカのことを睨みつけている。

一人は男子生徒だ。金に染めた髪を短く刈りそろえ、獅子のような気高い雰囲気を漂わせている。もう一人は女子生徒。制服の上にパーカーを羽織つていて、フードの下から覗く髪は萌黄色。感情の浮かばない整った顔立ちと、眠たげなジト目が特徴的だった。

そして男子生徒の制服の胸元には、聖討会の証であるエンブレムが飾られていた。共に、竜司にとつては見慣れない顔ぶれだった。

恐らくこうして少人数で仕掛けてきたのは初めてなのだろう。

「来い！ 神槍テイス！」

男子生徒が駆け出して、力を持つた言葉を紡いだ。



瞬間、空から銀の光が飛来する。その光は男子生徒の手に吸い寄せられ、硝子を碎くような澄んだ音を立て、たしかな形に鍛え上げられる。

それはゆうに五メートルを超える、一本の長槍（おさやり）だった。刃の先端は三叉に分かれており、支える柄には微細な装飾が施され、白銀のような美しい輝きを放っている。

「我が槍の露と消えよ!!」

男子生徒は一瞬のうちに距離を詰め、竜司めがけて鮮烈な突きを放ち——

「ざーんねん」

それを、竜司はほんの少しだけ体の軸をすらすことで軽く避ける。

虚しく空を切る刃先。男子生徒はしかしそれも予想の内なのか、顔色をわずかに変えることもなく体を回転させ、竜司の体を離さず、槍を振るう。

すべて、洗練された技能が垣間見える体運びと、隙のない猛攻だ。

さらに『救道者』としての身体能力のおかげか槍の付加する力によるものかは知らないが、人間の域を軽く超えたスピードをも有している。常人の目ならば彼の動きを、残像ですら捉えることなどできないだろう。

「いやあ、でも相手は俺だしね?」

自分の目前までに迫った槍の柄を、竜司は縄跳びのように飛んで回避する。

そして着地した竜司の眼前に、また槍の先端が迫り……。

「だあから当たらねえつてーの」

今度は上半身を後ろに反らせて回避。

我ながら実に鮮やかなあしらいぶりだった。そう、気を緩めた瞬間。

「!?」

頬にわずかな痛みが走ったかと思えば、視界の端で小さな鮮血の華が宙に踊っていた。

だが、きつちり今の攻撃は避けたはず。

竜司が素早く視線を前に戻すと、男子生徒は不敵な笑みを浮かべ、再度の突きを放つべく腰を深く落とした瞬間だった。

薄い危機感に突き動かされるようにして、竜司は脚に力を込めて後方に飛びすぎる。

その刹那、竜司がいたはずの空間に、白銀の槍が突き刺さった。

これもたしかに回避できた。だがその槍の刃先から何かの力が放たれる。それは空気を切り裂く破裂音のようなものを上げて、まだ空中にとどまる竜司めがけて襲い来る。

『禍の紡織衣』!!

問一髪、リリティカが展開した闇色の障壁に阻まれて、その音配は音もなく消失した。

そこでようやく竜司は着地し、距離を取つたまま相手と睨みあう。

痛いほど緊迫感と静寂が場を支配する。

気温が下がり、四肢に絡みつくような重々しさが漂い始め、風も怯えたように啼く。

男子生徒は大きく足を開いて腰を落とし、いつでも攻撃に移れるように槍を構えた。それを警戒しつつも、竜司は皮肉な笑みを向けて挑発する。

「はは、なかなかやるみたいじゃ——」

「ちょっと待つたあああああ!?」

しかし、突如としてそれを遮る声が上がった。

視線を落とすと、小脇に抱えたままでいた琴良が猛獣のよくな目で竜司のことを睨んでいた。

「当然みたいな流れで私を巻き込まないでくれる!? いい加減に放しなさいよ!」

「ああ、悪い悪い。忘れてたわ」

竜司は大人しく琴良と、ついでにリリティカを解放する。

「私はただの見学者よ。だから後は好きにして頂戴」

「そんなわけないでしょ!!」

琴良はそれをびしやりと軋り捨て、男子生徒を睨みつける。

「私は苦笑いを浮かべる。」

「酷いじゃねえか。さっきまで仲良く喋つてた仲だろ」

「それはそれ、これはこれよ。今回は槍使いみたいだし、きっと私の探してた人じゃないわ。

だからもう『災厄の魔獣』は用無しなの。ま、せいぜい見学させてもらうわ

「じゃあね、琴良ちゃん！ これよろしく！」

「はあ……？」

リリティカから重箱を押し付けられて、琴良は苦い顔をするのだが。

「……食べ物は粗末にしちゃいけないものね」

そう、諦めるように呟くと重箱を大事そうに抱えて、琴良は竜司たちから離れていく。

用無しだとか言つたわりに親切だつた。

ともあれ竜司とリリティカは、心置きなく『災厄の魔獣』として再び敵に相対する。

「さて、再開といこうじゃねえか。ひとまず名前だけでも聞いといてやるよ、ザコども」

「はつ……」

竜司の挑発を、男子生徒は笑い飛ばすだけだつた。

余裕たっぷりの笑みを浮かべ、堂々と名乗りを上げる。

「高等部二年『蒼狗騎士』四ヶ峰直政だ」

それに、いつの間にか彼の隣に立っていた女子生徒が無表情のままで。

「高等部一年『剪定鬼』散崎晉です」

一片たりとも感情の滲まない、冷えた声で言い放つ。その瞬間竜司はかすかな違和感を覚えて顔をしかめた。

(……なんだ、この匂い?)

誉が口を開くと同時に、ほのかな甘い匂いが竜司の鼻腔をくすぐった。気取られないようさりげなく周囲の様子を窺うも、それらしき匂いの元は見当たらない。そういうしている内に甘い匂いは消え去った。

首を捻りつつも竜司は意識を戻いに戻し、刺すような視線を送る二人に問いかける。

「直政と誉か。聖討会だと見ない顔だな?」

「私たちは本日、聖討会に仮入会しましたです」

それに誉が淡々と答える。完全な無表情のまま。

「なーんだ、新入りかよ。たった二人で俺たちに挑むとはいい度胸で——」

「この度は私たちの力量を図る試験として討伐任務を執行させていただきます。少人数ではありますですが、四ヶ峰さんは高等部一年A組、私は高等部一年A組と学年は違えど、共にA組所属ですゆえ、貴殿が言うような力量的には問題ないかと思います。ご理解いただけますですか?」

「お、おう」

誉の正論に、竜司は頷くはなかつた。

S組に劣るとはいえ、A組もトップクラスの実力者が揃っている。たしかにそれが二人もいるとなれば、相手にとって不足なしで……退屈しないで済むだろう。

最後に誉はそう言って、ぺこりと頭を下げてみせた。無表情のまま。

S組に劣るとはいえ、A組もトップクラスの実力者が揃っている。たしかにそれが二人もいるとなれば、相手にとって不足なしで……退屈しないで済むだろう。

「よつて、よろしく絶命してくださいです」

最後に誉はそう言って、ぺこりと頭を下げてみせた。無表情のまま。

S組に劣るとはいえ、A組もトップクラスの実力者が揃っている。たしかにそれが二人もいるとなれば、相手にとって不足なしで……退屈しないで済むだろう。

「よつて、よろしく絶命してくださいです」

「なんだとー?」

「ホームラン宣言ならぬ、返り討ち宣言である。

それによりティカが「きやーー!」と黄色い声を上げて竜司に軽く抱きついてみせる。

「りゅーくんさつすが! かつこいいねー!」

「はつ、当たり前すぎて賛辞にや物足りないな」

「たしかに! じゃあじやあ、ちゅーしてあげようか?」

「それは間に合つてる」

「なんだとー?」

ふざけ合ふやう竜司とりリティカ。

それは相対する者の闘志を削ぐか、殺意を増長するようなやり取りだ。

だが、この度の敵……直政も嘗も動じることはなかつた。

直政は距離を取つたまま呼吸を整え。

「つっだああああああああああああああ!!」

その場で空気を大きく揺らすほどの、音速の突きを放つ！

気合も勢いも、先ほどとは段違いの攻撃だ。

ただしそれももちろん、竜司たちからは遠く離れていて、空を突くだけのはず。

だがその槍が突いた点から不可視の斬撃がいくつも生まれた。それらの斬撃は竜司とリリティカめがけて、唸りをあげて襲い来る。

「あらよつと」

竜司はリリティカの手を引き、すべての斬撃を間一髪でかわす。

しかしそれで終わりではなかつた。またも次の一波が放たれる。

一步前に出て『禍の紡織衣』を展開しようとするリリティカを、竜司は片手で制する。

「これくらい俺一人で片付けるさ」

「そお?」

「ああ。だからお前は」

残りの一人を警戒してろ、と続けかけたその時。

「!?!」

竜司とリリティカの真上から巨大な影が差す。

見上げれば、二人の真後ろに土塊でできた何かが立つていて。足が短く手が妙に大きい、不格好な造形のゴーレムだ。体には苦悶の表情を浮かべた顔がいくつも浮かんでいて、声なく悲鳴を上げていた。

ゴーレムは土や雑草をボロボロと落としながら、リリティカに覆いかぶさるようにして迫る。その不気味な姿は、図太い竜司ですら嫌悪感を抱くほどだつた。

そして、リリティカにとつては。『いいいいいやああああ!?』『禍の紡織衣』『いいいいい!?』
「いいいいいやああああ!?』『禍の紡織衣』『いいいいい!?』
もう、生理的に無理だつたらしい。

「ちよつ!?!」

竜司がリリティカの手を引く前に、リリティカは『禍の紡織衣』を紡ぎ上げる。『禍の紡織衣』に触れたゴーレムはその瞬間に力を失い、大きな音と地響きを立て崩壊しつぶされる。

リリティカはその土砂を頭から被つてしまふ。
あつという間もなく、見事な生き埋めだつた。

目の前につぶされた巨大な山を見上げ、竜司は一瞬だけ呆気にとられてしまう。

リリティカがこの程度で死ぬとは思えないが、さすがに放つておくわけにはいかない。

竜司は山を崩すべく土砂をかき分けるのだが。

「思った通りだ!!」

その背後から、直政が強烈な突きを打ち出してきた。

竜司はそれをまた軽く回避する。

「おっと」

だが、かわした瞬間に右の二の腕がほんの少しだけ切り裂かれた。

「あの女の、忌々しい魔の障壁はあらゆる攻撃を無効化する！ だが!! それで無に帰すことができるるのは異能の力のみ！ だからこそ、それ以外の、力を込めた物体自体は消し去ることができない……！」

「ご明察」

すべて直政の言う通りだ。

リリティカの『禍の紡織衣』は万能に見えて、実は穴がいくつもある。

異能の力を無に帰すことができても、単純な槍での攻撃や土砂といった形のある物質はそのまま残ってしまう。その証拠に、昨日の集会で受けた何百本もの剣の雨も、剣に込められた聖なる力を消し去ることができただけで、呼び出された剣そのものはグラウンドに散らばる結果になっていた。

「だが力が一か所でも『禍の紡織衣』に触れれば、その力すべてを消せるつつ一エゲツなさなんだぜ？ すぐえだろ？ 裹め讀えてくれたつていいんだぜ？」

「あの障壁は貴様の力ではないだろう。それをどうして貴様が誇る」「何をほざくかと思えば」

攻撃を巧みに避けながら、竜司はニヤリと笑つてみせる。

「あいつは俺の片割れだ。あいつの力も思いも、すべて俺のもんだ。だから『禍の紡織衣』も俺の持つ力のひとつなんだよ」

「はっ！ 言つている！」

槍で仕掛けられた足払いを、竜司は軽いステップでかわす。

だが槍が空を切ると同時に、制服のズボンが何箇所も切り裂かれた。また不可視の攻撃だ。鬱陶しいことこの上なく、竜司は反撃に出ることにした。

目指すは無論、直政の懷だ。長物を相手にする場合は定石の手。

直政が槍を大きく振り切ったタイミングを見計らい、無防備なその懷に潜り込む。「掌底です」

しかし真横から突如現れた壁のようなものによって、竜司は思いつきり吹き飛ばされた。何度も地面を転がった先で竜司が見たのは、地面から生えた土塊の腕だった。先ほどリリティカが無効化したゴーレムと同じもの。あれに強烈な平手打ちを受けたのだろう。

その少し向こうから、誉が無感動な面持ちでやつてくる。

「これまでの戦闘記録から、『禍の紡織衣』の有効範囲は術者を起點として直径約四メートルの半球と推測されます。よつて」

「直政との攻防によつて、竜司はその山からかなり離されてしまつていた。

「盾を足止めして、剣を引き離せば勝ち筋が見える……です」

「はは。ザコにしちや中々やるじゃねえか」

たしかにこの距離なら『禍の紡織衣』は届かない。

今、竜司は最強の盾という庇護を失つたことになる。

だが、竜司は誉の言葉に、ただせせら笑うだけだつた。

「しかし土使いなんつー地味な能力で、ここまで俺を楽しませるなんてな。褒めてやるぜ」

「害獸に賛辞を頂戴するとは驚愕するです」

「こいつの言葉に耳を貸すな」

直政がわざかな苛立ちを滲ませて誉を睨みつけ、竜司に向けて槍を構える。

「その余裕がいつまで持つかな！ 魔獸よ！」

そう叫んだ瞬間、またも竜司の腕や足が何箇所も切り裂かれた。

（これはちーつとばかり……ムカつくかもなあ）

竜司はほんの少しの怒りを覚えつつも、あちこちの傷を触つて確認してみる。傷口はどれも鋭利な刃物で斬り付けられたようにぱっくりと割れている。そして、どこもかしこも、ほんのわずかだが濡れていた。

竜司は自分の姿を見下ろしてみる。せつかく琴良が返してくれた上着も、すっかりあちこち切り裂かれた上に血と泥で汚れてしまつていて。

（これはちーつとばかり……ムカつくかもなあ）

竜司はほんの少しの怒りを覚えつつも、あちこちの傷を触つて確認してみる。傷口はどれも鋭利な刃物で斬り付けられたようにぱっくりと割れている。そして、どこもかしこも、ほんのわずかだが濡れていた。

「水か

「ふん」

竜司の言葉に、直政はニヤリと笑う。

魔力で生み出した水に高圧力を加え、槍の突きと共に打ち出して、敵の身を斬り付ける。判明してみれば実に分かりやすい攻撃手段だ。

だが、そのカラクリを明らかにされても、直政の笑みは消えなかつた。

「それが分かつたところで貴様に打つ手はないだろう。我が槍の間合いは戦場のすべてであり、何人たりともその目で捉えることはできない！ どれだけ逃げようとも、貴様は肉を削がれる運命なのだ！」

「いや、肉とかドヤ顔で言つてるところ悪いんだけどよ、俺の皮をちーつとばかし切るだけじゃん？ その辺どう思う？」

「う、うるさいッ！ 普通の相手ならば、肉も骨も区別なく切断せしめるはずなんだ……！」

「つまり俺の素の丈夫さが優つてゐるつてわけか」

竜司が納得の顔で直政をしげしげと見つめる。その堅張感のない様が腹に据えかねたのだ。

「好きなだけほざくがいいさ。打つ手の尽きた手負いの獣など恐れるに足らぬ」

「手が尽きたあ？ 昨日の集会みたく、全て吹き飛ばしてやつてもいいんだぜ？」

「丸腰の貴様に何ができる。女がいなければ、あのデタラメな剣は出せないのでろう」

「あはは……」

これまた國星である。竜司は少し引きついた顔で笑つてみせる。

「たしかに竜司だけではある大剣……アウスレーヴを呼び出しができない。

その反応に、直政は獰猛な笑みを浮かべて叫ぶのだ。

「手下の『災厄の牙』すら呼べぬ哀れな獣よ！ 今こそ貴様の死ぬ時だ！」

直政が槍を携えて駆け出してくる。種も明らかとなつた、皮膚しか傷めない攻撃とはいえるが、たしかにこれはいい気がしない。

「逃がさないです」

「うおっ」

誓の声に応じるようにして、地面から土塊の腕が何本も生えてきて竜司の足を捕らえた。

まるで地獄の底から生者を引きずり込もうとする、この世ならざる悪魔の腕だ。

「うおお氣色悪い……」

少し殴りつけてみると、土塊の腕はあつさりと碎けてしまう。だが所詮は土塊。少々形が崩れてもすぐに復活するし、次々と新しい腕が生まれては竜司に絡みついた。リリティカではな

いが、たしかにこれはいい気がしない。

そうこうするうちに直政がもう目前に迫っていた。

身動きが取れないままに槍で突かれれば、さすがの竜司も無傷で済むはずがない。絶体絶命。

打つ手はすべて尽きてしまった……よう見えた。

「……仕方ねえか」

だから竜司は、ほんの少しだけ本氣を出すことにした。

呼吸を整え、目を瞑る。

思い描くのは、自分の力だ。

かつて得た数多の力の、ほんの一部分。

竜司は右の拳をしつかり握りしめて。

「必殺……！」

自分の足元を、ほんの少しだけ気合を入れて殴りつけた。

【神霸滅拳】

竜司を中心として空気が引き寄せられ……次の瞬間、周囲の地面が炸裂し、途轍もない爆音

が世界を揺るがした。

水面に琴良が落ちたように、竜司を起点として凄まじい衝撃の波紋が広がった。衝撃波は幾重にも疾駆し地面を抉り砂塵を巻き上げ、ゴーレムたちや間近に迫っていた直政と蒼を諸共に吹き飛ばした。二人の悲鳴を搔き消すほどの烈風が荒れ狂い、しばし嵐のような喧騒が場を支配した。

そして風が収まつたのち。

「ふいー」

嵐の後には、見渡す限りに巨大なクレータができる。

その中心で竜司は一仕事終えたような顔で立ち上がる。

周囲を見渡して、自分の拳を見つめ、そしてニヤリと満足げに頷く。

「ま、こんなもんだろ」

「りゅーくんの、バカー!!」

「ふぶつ!?」

そんなふうに浸つていると、思いつきり横つ面を殴られた。グーで。

見ればリリティカが肩で息をして、竜司のことを睨みつけていた。先ほどの一発でリリティ

あつたとしても、竜司としては感謝されても、殴られる道理はないはずだ。それが痛くもなんともない攻撃で力が埋まつていた土砂もついでに吹き飛んだので、脱出することができたのだろう。だから竜司は感謝されても、殴られる道理はないはずだ。それが痛くもなんともない攻撃で

「なんだよ、俺のおかげで出てこれただろうが」

「やり方が乱暴すぎるの！」

竜司の抗議に、リリティカはブンブンと分かりやすく憤慨する。

「おまけに本気まで出しちやつてもう！ アウスレーザで戦う以外は禁止つて約束でしょ!?」「他に手はなかつたんだよ。考えなしに『禍の紡織衣』を使って生き埋めになつたバカには、とやかく言われたくねえな

「そうだとしても、ちよつとは加減してくれてもいいでしょ！ おまけに見てよこれ！」

「全部ふつとんじゃつたじゃない！ せつかくステキなお昼寝スポットだったのに、これじゃあ台無しでしょ!?」

「知らねえよ。明日になりや、誰かが元通りに直してくれるだろ」「どうどう、とリリティカを宥める竜司だが。

「!?」

鋭い殺気を感じて身をかがめると、その瞬間、凄まじい勢いで竜司の頭上をしなる鞭のような何かが通過した。

いつの間に接近していたのやら。琴良が回し蹴りを放った瞬間だった。

「パンツ見えてんぞ」

「なつああああああああああああああ!?」

「慌てて飛び退き、顔を真っ赤にして竜司を睨みつける琴良だつた。

竜司は呆れ返つて琴良に半眼を向ける。

「見せてくれるんならありがたく見るけど……お前、もーちょっとお淑やかにできないわけ?」「あんたねえ……! 私まで巻き込んでおいてその言い草は何?!! 死ぬかと思ったわよ!!」

「でも死んでねえだろ?」

「結果論で語るな!! 過程を謝りなさい!!」

琴良は目を吊り上げて激怒する。髪はぼさぼさで残念な感じだが、しつかりリリティカが託した重箱を抱えて守つてくれているあたり眞面目である。どうやらそのせいで足技しか使えないかつたらしい。

「まあまあ、お前らひとまず黙つてろ。俺はまだやることがあるんだよ」

恨みのこもつた眼差しを向ける琴良とリリティカを押しのけて、竜司は一步前に出る。

はるか遠くのクレーターの端に、ふらふらと立ち上がる直政が見えた。酷い傷はなさそうだが、制服のあちこちは擦り切れ、その顔には色濃い驚愕と畏れのような感情が滲んでいる。直

政の隣には誉が座り込み、竜司のことを躊躇みするかのような目で見つめていた。

どちらからも、最初のような燃え盛る闘志は感じられない。

だから竜司はわざと挑発するようになつてのける。

「こちとらもう半年も『救道者』どもに命を狙われてるんだ。得物がなけりや戦えないなら、

もつと早くに殺されてるだろ。舐めんじやねーよ」

「嘘……だろっ!」

直政が蒼白な顔色で絞り出すように叫ぶ。

「封印は!? 封印はどうなつてるんだ!?」

「効いてるつづーのもちろん」

「……つづ!」

竜司の言葉に、直政は絶句する。

「封印……?」

琴良が怪訝な顔で呟き、それにリリティカが得意げな顔で説明する。

「この島全域にはね、わたしとりゆーくんが出られないようにする封印と、力を制限する封印がかけられているの。その要が学園施設の地下にあるものだから、校舎の中で戦うのはご法度なんだよ」

「ふうん……制限ってでも、具体的にどれくらいなの?」

「なあに、しけたもんさ」

竜司は琴良にニッヒ無邪気に笑つてみせ、単なる事実を突きつけてやる。

「俺たちの力を、たつた千分の一の力に抑えるだけだ」「なつ!」

今度は琴良も直政と同じように絶句する。

先ほどの無茶な一発は、竜司の秘めた力のほんの一端が現れたにすぎないのだ。七つの世界の修羅場をくぐり抜けた琴良ですら信じられないとばかりに目を丸くして、竜司のことをしげしげと見つめる。

そこに更にリリティカがしたり顔で補足する。

「しかも今の一発。りゅーくんにとつては、その千分の一の全力ですらないからね?」

「まつたく……つくづく化けモノね、あんたたちって」

「はつはつは、そう褒めるなよ」

朗らかに笑う竜司に、リリティカは唇を尖らせ不満を顎わにする。

「でもでも本当にあんまり無理はしないでね?」

「なあに、お前が心配するほどのことはやんねーよ」

「むう……」

なおも不満そうにふてくされるリリティカだったが、それ以上は何も言おうとしなかった。

「おい、もう一度行くぞ!!」

竜司たちがそんなやり取りを繰り広げる中、直政の声が響き渡る。

ふらつきながらも槍を構え、最後に残つた闘志を無理やりに燃やす直政。

しかし、側の譽はゆるゆると首を振る。

「無理だとと思うです」

「何故だ!」

「あの害獸の力量は測り知れませんです。それに、今回聖討会から私たちに課せられた任務は『害獸を相手取り、力を見せろ』とのことです。だから十二分にその任務は果たして——」「もういい!!!!」

直政は槍を振るつて譽の淡泊な言葉を遮った。

「貴様と組んだのは聖討会からの指令があつたからだ……! こうなつたら俺一人でもやつてやる!! 魔獸をあそこまで追い詰めることができたんだ! 俺は強い! だから俺はこのまま魔獸を殺して……俺は……!!」

そう叫び、直政は槍を高く掲げる。するとその先端に渦巻く水流が生まれた。水は次第に大きさを増し、うねりを上げて何かの形を成し始め……。

「蒼宮搖蕩いし尊き王」

かんだかす

直政の声と共に、水は甲高い澄んだ音を立てて凍りつき、一匹の龍へと変容する。

空高く嘶くその氷龍は見上げんばかりに巨大であり、太陽の光を受けて煌めく氷の鱗は名匠の鍛え上げた刃を思わせた。氷龍は蛇のような長い胴体をくねらせ空を駆け、氷柱の牙を振り廻し、竜司とリリティカに肉薄し……。

「だあめ♪」

だがその瞬間、リリティカが張り巡らせた《禍の紡織衣》に触れ、氷龍はビタリと中空で静止してほどなく重力に従い落下する。

そして辺り一帯に響き渡るほどの高く澄んだ音色を奏で、無残にも碎け散ってしまった。『どうだ参ったか』とばかりに唇を舐めて、リリティカは呆然と立ち尽くす直政に微笑みかけた。どうも生き埋めにされたことを根に持っていたらしいが、若干氣は晴れたよう。

「もうやめようぜ？」これじやあ消化試合もいいところだ

そんな直政に、竜司は静かに語りかける。

直政たちが竜司に一瞬でもアドバンテージを取れたのは、リリティカという盾を無力化することに成功したからだ。それが今となつては盾の封印は解かれ、なおかつその封印の要となつた誓は戦意を失つてしまっている。おまけに同じ手は二度通用しない。

「俺は基本、去る者は追わない主義だ。《救道者》を殺すこともしない。例え一人でも殺しちまつたら、その他全員が捨て身でかかってきやがるだろ？ 嫌なんだよ、そういう面倒くせえのは」

事実、竜司はこの島に連れてこられてからただの一人も《救道者》を殺めていなかつた。だから降伏を促すのだが、直政は唇を囁み締めたままだつた。

（参つたなあ……）

経験上、こうした手合いがそう簡単に諦めてはくれないことを、竜司はよく学んでいた。自分が相手にするのは、異世界を身一つで救つてきた《救道者》なのだ。

多くの者が、心が折れかけても、それをバネにして立ち向かう心の強さと、勇敢さを持ち合わせている。しかもそれは一対一の場合に發揮されることが多い。

多勢に無勢の集団討伐のような状況では、彼らは一人一人が没個性な兵となる。だが、強敵との一騎打ちともなれば話は違う。彼らはその時、紛うことなき救世の英雄となり、文字通り死に物狂いで竜司たちに立ち向かつてくるのだ。自分が倒れれば世界が滅ぶという極限状況を経験した者にしかない、究極の強みだつた。

（まあ……そりやなきや、俺たちが困るんだけどな）

竜司はそう、胸の内だけではやいた。

すべては自分と、リリティカが望んだ通りに進んでいた。

《救道者》たちには、竜司たちを倒せるくらいに強くない、でも、わななければならぬ。

だからやるべきことなど一つだ。ここで徹底的に力の差を見せつけて、直政の心を折る。残酷かもしれないが、きっと彼はそれを乗り越え、今よりも更に強くなってくれることだろう。

これまで竜司とリリティカが倒してきた、他の《救道者》たちと同じように。

竜司はそのために、直政に向けて一步を踏み出す。だが。

「その通りよ」

それよりも先に、琴良が動いた。

「まったく……同じ《救道者》として見てられないわ」

琴良は重箱を足元に置いてから、一步、二歩、ゆっくりと直政に向けて歩み寄る。

背後から竜司たちの慌てる声が聞こえるが、気にしてなどいられない。

諭すような口調で直政に語りかけた。

「あなたたちは結構いいところまでこいつらを追い詰めたものだから、諦めるのは悔しいかも

しない。でもね、今日はもう無理よ。撤退だって立派な戦術で——」

「うるさい……っ!!」

琴良の言葉を、直政はあらん限りの大声で遮った。

その目に浮かんでいるのは苛立ちと憤怒と……そして、絶望の涙だった。

「貴様はこいつらの味方をするのか？」貴様は自由が欲しくはないのか？ 僕たちは《救道者》なんだ！ 異世界を救つた英雄なんだぞ!! そんな俺たちがどうして……！ どうして!!」

直政は世界を、すべてを恨むように慟哭の叫びを上げる。

「どうしてこんな島に、閉じ込められなければならぬんだ!!」

「……っ」

それに、琴良は一瞬だけ言葉に詰まる。

だがすぐに頭を振って、言い放つ。

「私たちは《救道者》。世界のために戦う力と、使命があるのよ。だから仕方のないことなの」

この島には《災厄の魔獸》を封じ込め、弱体化させる特殊な術がかけられている。

そう、琴良は学園に来る前に聞かされていた。

術で守られたこの島は外部からの侵入を受け入れても、内部からの逃遁を決して許さない。一度島に入つてしまえば、『魔獸の討伐』という演目が終わるまで《救道者》たちは舞台を降りることすら許されない。

だから魔獸を倒すまで、誰もが卒業できない。自由を手にできない。

それが、綾神学園だ。

琴良はそのことを覚悟した上で、この島にやつてきていた。

炎の剣を持つたあの《救道者》を見付け出すために。

そして何よりも、力を持った人間としての使命を果たすために。

「知つたことか……!!」

だが、そのことに『サザブレス』の全員が納得しているわけではないのだろう。かつての栄光の日々とは異なる、島での軟禁という処遇に不満を抱く者は少なくないことくらい、琴良にはよく理解できていた。

「俺は自由が欲しい……！」聖討会に入会を希望したのだから、メンバーは島の外に出られるからだ！！だが、それは学園の任務を行う間という、仮初めの自由にすぎない！魔獸を倒さぬ限り、真の自由は得られない！！

ある者は使命感から『炎厄の魔獸』を憎み。

ある者は自由への渴望から『炎厄の魔獸』を恨む。

よくできたモチベーション付加だと琴良は思う。

直政は後者の一人なのだ。その身から痛いほどの怒りを滲ませながら、ゆっくりと白銀の槍を構える。荒い呼吸をすつと整え、体の重心をわずかに後ろに移す。彼を取り巻く空気が、白く霞んだようにはけや始めた。

「俺の邪魔をすると言うのなら……貴様諸共、魔獸を倒してやる!!」

直政の周囲に突如として何十本もの氷柱が出現する。

円柱型の巨大な氷柱は、すべてがその鋭利な先端を違うことなく琴良に向いていた。

『蒼海君臨せし狂狗』

「！」

琴良が身構えると同時に、氷柱が矢のように放たれた。

素早く後ろに飛び退き先陣を回避するのだが、なおも多くの氷柱が降り注いでくる。高く澄んだ破碎音は死刑を告げる鐘のように残虐な響きを有していた。

破片が頬を掠める中で。

（仕方ないわね……っ！）

琴良は愛剣を呼び出すべく、右手のひらに力を込める。

すぐ目の前には氷柱の先端が迫りつつあった。それでも十分に間に合うことを琴良は培つた経験で、肌で理解していた。だが結局、その手に剣を生み出し振るう機会は訪れなかつた。

「お前、やっぱりバカだろ？」

「なつ……!!」

目の前に立ちはだかった背中に、かつての苦い記憶を思い出してしまつたから。

嫌な予感に駆け出して、見事間一髪だった。

竜司は琴良の目の前に滑り込む。そして琴良を背中に庇いつつ拳を握り、今まさに降り注がんとする氷柱の大群に向けて突き上げた。

「碎けろ!!」

拳は空を切り、鋭い烈風を巻き起こし、氷柱すべてを碎き尽くした。竜司はほつと息をつく。

季節外れの電が向こうに、轟然と立ち尽くす直政が見えた。

竜司の背中に庇われたまま、琴良が声を震わせて叫ぶ。

「な、なんで今回も助けるのよ!! あんたは私たちの敵……

『災厄の魔獸』

なんでしょう?」

琴良はひどく戸惑っているようだつた。囁みつくような叫びには不安のようなものが滲んで

いる。竜司はそんな琴良を振り返り、苦笑を浮かべてみせるのだ。

「なあに、変なのはお互い様だろ。それに……」

本当に、『災厄の魔獸』なら、どれだけ楽だつたか。

竜司の小声のつぶやきに、琴良が目を丸くする。

その刹那だつた。

重い衝撃が竜司を襲い、視界の隅で大きな鮮血の華が咲いた。

琴良の大きな悲鳴が上がる中、一拍遅れ、脳を抉るような痛みが竜司を襲う。

視界が霞み、脳を埋め尽くすのは、猛烈な苦痛と吐き気と血の臭いだ。自分の心臓の鼓動が痛いほど耳につく。それに合わせておびただしい血液が零れ落ち、竜司の足元に血溜まりを作つた。

「ぐ、つうつ……！」

混濁する意識の中、竜司は歯を食い縛つて耐え、自分の体を見下ろす。

「うつ……わ」

自分の脇腹から血塗れの何かが生えていた。周辺に舞う電と同じ煌めきを持った、白銀の槍。その槍をしかと攔んで体を支え、竜司はただ、前方にいる人物を睨む。

「か、はつ……セコいことしやがつて……！」

「は……はは……！ 敵から目を離した貴様が愚かだつたまでのこと！」

目と鼻の先、至近距離で、直政が鬼のような形相で笑いながら立つていた。

今しがた竜司を貫いた槍をしっかりと両手で握り締め、直政は壊れたように笑い続ける。

「はははは!! 魔獸の分際で情けを出すとはな……！ 女！ お前のおかげで魔獸が討伐できる！ 魔獸は貴様を庇い、そして死ぬんだ!!

「……つ！」

竜司に庇われたまま、琴良が短く息を呑む。

それは達成感とは真逆のものだつた。痛いほど後の悔い悲しみ。

『救道者』としては失格の、だが人としてとても温かな感情。

背中に感じるそれらの感情を、竜司は受け取つた。理解した。

だがそれを、『災厄の魔獸』として認めるわけにはいかなかつた。

「誰が、誰を庇つたつてえ……!?」

だから、竜司は嗤う。

直政の獲物を仕留めた高揚感を、ぶち壊しにかかるのだ。

「勘違いするんじゃねえ!! 『救世者』同士の小競り合いなんてケチで醜い小芝居が気に入ら

なかつただけだ! 興が削がれるだろがよお!」

「興だと……!?」

「ああそうだ!! 興だ!! すべては余興だ!! 俺たちがどうしてこんな島で、てめえらの遊び

に付き合つてやつてると思うつ!」

竜司は血反吐を吐き捨て、醜悪に嗤う。

「楽しいからだよ! 俺たちの足元にも及ばねえぞコどもが、世界の命運だの大義だのを語つて、群れて、挑んで、悩んで、そして最後に俺に叩きのめされて絶望する! 俺たちはそういう一流の喜劇を見るために、わざわざ手を抜いて、てめえらと遊んでやつてるんだ!」

竜司は怒鳴りながら、腹から生えた槍からそつと右手を離す。

そして、流れるように後ろに引いて。

「だから同士討ちなんつー楽しくないことをされるとな……観客としちゃ困るんだよ!!」「出でよ! アウスレーゼつ!!」

駆け寄つたりリティカと、ほんの一瞬だけ手を触れ合う。

そして振り上げたその右手には、一振りの大剣……アウスレーゼが握られていた。

直政は驚愕の面持ちで竜司の身体から槍を抜く。そうして応戦しようとするのだが、つんのめるようにしてその動きが止まつた。地面から生える土人形の腕。それが直政の足首をしかと捕らえていた。

「散崎……!?

「よくやつたです、四ヶ峰さん」

やや離れた場所で誉が、さも残念そうに首を振る。

「ですが……こうなつては用済みなのは貴方の方です。ご苦労様でした、です」

栓が無くなつたせいで、これまで以上の勢いで竜司の腹からボタボタと血液が流れ出る。常人ならば気を失うどころか、とうに絶命している出血量だ。噎せ返るような血臭で意識を手放しそうになる中で、竜司はただがむしやらに踏ん張つて。

「根性入れ直してから出直しやがれ!!」

アウスレーゼを横薙ぎに振り抜いた。

肉を叩く嫌な感触とぐもつた悲鳴。土人形の破碎音。

それらを残し、直政が勢いよく吹き飛んだ。構えた槍と共に何度も地面を転がつて、ようやく止まつた先でうつ伏せになり、あとはビクリとも動かない。

竜司はそれを確認して、ようやく力を抜くことができた。アウスレーゼから手を放し、自分

の作った皿溜まりに頭からぶつ倒れる。微睡みに沈みそうになる中。

「し、しつかりしなさい!!」

すぐくに悲鳴のよくな声で叫き起こされた。

琴良が血溜まりに膝をついて竜司を抱き寄せ、必死に呼びかけてくる。

「これくらいなら医療所まで行けばきっとすぐ治るわ！ だから……!!」

「無駄だつーの……」

「どうしてよ！ まだ助かるわ！ 諦めるなんて許さないわよ!!」

この島には、あらゆる世界の科学と魔法を集結させた医療施設が存在している。腕が吹き飛ぶ程度の怪我なら一瞬で元通り治癒することが可能であり、どんなに半生半死の有様だろうと死体でない限りは半日程度で歩けるようになるという。

だから琴良の主張はわかるのだが……それは《救道者》たちにとつての理屈だ。竜司はかすれた声で笑い飛ばす。

「バーカ……俺はお前らの敵の、《災厄の魔獣》だぞ……死んでなんばの化けモンを、どこ

誰が……治療してくれるって言つんだよ……」

「つ?!」

本気でそのことに思い至らなかつたのか、琴良が息を呑む気配がした。

《救道者》としてはあまりにお粗末だ。竜司は琴良を見上げてせせら笑う。

「だい、ち……おまえ……さつき俺に、死んでこい、とか言つてたろ……が」

「つ?!」

「事情が変わつたの!! 庵われたままで、借りも返せないままに死なれてなるもんですか!!」

「め、めちゃくちゃな《救道者》だな……ああ、制服……返してもらつてすぐ、ボロボロになつちまつて……悪かつたよ」

「そんなことどうでもいいわよ!! いいから黙つてなさい!!」

そんなやり取りをする最中も、竜司の傷口からは血がとめどなく流れている。よくもまあ尽きないものだと、場違いな感心を抱いてしまうほど。

「バカだねえ、りゅーくんは」

そこに、呆れたような声がかかる。気力を振り絞つて視線を向ければ、リリティカが腰に両手を当てて、ため息をついて自分のことを見下ろしていた。

「わたしを抱えて、琴良ちゃんのところまで走ればよかつたんだよ。それをどうして一人で突つ走つちやうかなあ。そしたらムダに怪我をすることもなかつたのに」

「……うるせえよ」

悪態を返してみるが、リリティカの言うことももつともだつた。

気付いた時には何も考えずに飛び出していたのだ。先ほどへマをして生き埋めになつたりティカの浅慮を笑えない。だから琴良に抱きかかえられたまま、竜司はそつぽを向く。

「でもね、そんなバカなりゅーくん……カッコよかつたよ」

「ぐつあ!! お、お前つ……?!」

リリティカが竜司の側にしゃがみ、その傷口にそつと手を重ねる。
苦痛に呻く竜司だが、血の混じる唾を飛ばして叫ぶ。

「バカ！ やめろ！ この程度、ほつときやそのうち塞がる!!」

「おとなしくしててね」

リリティカがゆっくりと目を瞑ると、長い銀の髪がふわりと浮かび、その体からほのかな光が溢れ出す。短く息を呑む琴良。竜司はそれを見守るしかない。
厳かな、それでいて心が安らぐようなその光は次第に竜司の傷口に流れ込み、竜司は痛みが格段に引いていくのを感じて……苦々しい思いで目を閉じる。

「おーわりっ」

そして、それは唐突に終わってしまう。竜司が目を開いて起き上がった時には、リリティカの体を包んでいた光も、脇腹に空いていたはずの風穴も、すべてが嘘のように消えていた。それどころか、戦いの最中できていた無数の裂傷ですら跡形もない。貧血気味で頭がぼーっとするくらいで、ほとんど全快だ。

「お前なあ……」

「さっきりゅーくんだってアウスレーゼ以外の力を使つたでしょ。だからおあいこだよ」

抗議を込めた目でリリティカを睨んでみるが、さらつと正論を返されて竜司は黙るしかない。

ただ、その光景に納得のできない者が一人いた。

琴良だ。あんぐりと「口を開いて、リリティカのことを穴が開くほど見つめている。

「あ、あなた、その力は一体……ってか、何よその耳!?」

「ありやー」

琴良に指摘されて、リリティカは自身の耳を髪でいそいそと隠す。

長く尖った、人ならざる者の証である、その耳を。

目を丸くする琴良と、苦い顔をする竜司とに、リリティカは舌を出してウインクしてみせる。

「バレちゃった」

「ほらな……だから止めたんだよ」

竜司は諦めつつも頭を抱える。そこに琴良が絞り出すように尋ねてくるのだが。

「あなた……一体何者なの……？」

「えっへん、実はですね！」

リリティカは胸を張って、訝しそうに琴良に告白する。

「とある世界で、女神をやっていたのです☆」

「…………は？」

結果、滑ったような空気が流れた。

固まる琴良に、竜司は痛む頭を押さえながら懇願する。

「あー……とりあえず黙つてくれ。な？ それでさつきの貸しはチャラだ」

「うつ……わ、分かつたわよ」

貸しはチヤラ、という言葉に釣られるようにして、琴良は渋々頷いた。しかし何かに気付いたとばかりにハツとして竜司に詰め寄る。

「い、いや!? それだけじゃないわ！ あんた確かさつきこう言ってたわね？ 本当に『災厄の魔獣』だつたら云々つて……あれは一体どういうことよ!?」

「え……俺そんなこと言つたかな？」

「言つたわよ!! どうしたことだかきつちり説明しなさい！」

「なんのことだかさつぱりだわ」

眉を吊り上げ追及する琴良から、竜司は逃げるよう視線を逸らす。

その視線の先で、リリティカが呆れ返つたような顔をして竜司のことを見つめていた。

（いや、なんつーか……絶対聞こえないと思ってたんだよ。どんな地獄耳だよ、こいつ）

そんなふうにリリティカと目で会話しつつ、竜司は話を変えようとするのだが……。

「そうだ誉……!?」

すっかり忘れていたもう一人の襲撃者を警戒して、その姿を探す。

だが、誉はもうすでに辺りのどこにも見られなかつた。

逃げ足の早い奴、と竜司は苦笑し……ふとした疑問が浮かぶ。

（あいつ……なんだつて最後、仲間の邪魔をするような真似をしたんだ？）

「あらあ～？ もう終わつちやつたのぉ～？」

間延びした声と共に、緩んだはずの空気が一転して冷え切つたものとなる。

いつの間にか、倒れた直政を見下ろすようにして一人の少女が立つていた。

ゆるくウエーブのかかった髪を腰まで伸ばした、肉感的な体つきの美少女だ。軍服じみたコートを袖を通すことなく羽織り、同色のベレー帽を頭にちょこんと乗せている。足元を飾るのは高いピンヒールの編み上げニーハイブーツ。豊満な胸元には直政と同じエンブレムが飾られていた。そんな彼女は竜司たちに向けて手を振り、朗らかに笑うのだが。

「こおんにちはあ～『災厄の魔獣』たち～。ご機嫌いかがあ～」

迷わず竜司は地面に転がるアウスレーゼを掴み、少女めがけて駆け出した。

風よりも速い俊足で間合いを詰め、思いつきアウスレーゼを振りかぶり——

「ざあんね～ん

思いつき空振りして……背後から首に両腕を回される。

背中に柔らかい乳房が押し付けられる感触。

耳元には生温かい吐息。甘つたるい香水のような匂いが鼻腔をくすぐつた。

魅惑的なはずのそれらの感覚は、ゾッとするほどに作り物めいて、竜司の背中を冷たい汗が伝う。竜司はその腕をふりほどき、アウスレーゼを振り向きざまにまた思いつきり振るつた。しかし、それも見事に空振りに終わつてしまつた。

「いやねえ。あたしにそんなの当たるはずないつて、分かつてるくせにい」

声を頼りに姿を探すと、すでに少女はリリティカと琴良のすぐ側に立つていた。

わずかな風や足音など、何の気配も見せることなく少女は自由自在に移動する。

それが彼女の特技だと分かつていても……竜司は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるしかない。

「……一体何をしにきやがつた」

「そう殺氣立たなくていいわよお。今日は別の用事があつてきただけだからあ」

少女はのほほんと言つてのけるのだが、竜司は警戒を緩めない。リリティカも眉を顰め、少女に疑いの眼差しを向ける。ただ一人先日島にやつてきたばかりの琴良だけが、彼女のことを知らないらしく首を傾げて突然の闖入者を見つめていた。

そんな琴良に、少女が目を丸くして微笑みかける。

「あらまあ、初めましての子がいるわねえ。もしかして、あなたが転入生の館宮さんかしらあー？ いきなりS組に入ってきたつていうー」



「え、えと……そうですけど。貴女はどちらさま？」
「あたしは聖討会の、高等部三年S組《虚数立体》メビウスキューブこと百薙伽藍よお。《原初の七人》なんて呼ばれたりもするわあ！」

「なつ……!?

少女——伽藍の告げた言葉に、琴良は言葉を失つてしまふ。

それは先ほど竜司たちが語っていた聖詩会トップの名前だ。

言いしれぬ緊張感が場を支配する中、竜司は囁みつかんばかりの敵意を込めて伽藍を睨む。

「……別の用事つてのはなんなんだよ」

「新入りさん、実力を見にきたんだけれどねえ……どうやら遅かってたみたいねえ」

「あらあ〜?
おかしかわねえ。たしか、今回の試験は一人だつたと思うんだナビお〜」

「ああ。あとの一人なら逃げたみたいだ」

「そお～。不利になつたらちやんと逃げるなんて偉いえら

でも、仲間を見捨てて逃げるのはマイナスかなあ～？」

そ う ば や き つ つ 、 伽 藍 は 直 政 に す つ と 人 差 し 比

一とりあえずう。医療所までひとつとび
えが
二二二二二、二三〇二月一、二三〇二月一、二三〇二月一

そしてぐるりと空中に円を描いた瞬間

空間が揺らぎ、ほんの少しだけ気温が下がり。

「えつ?」
直政の姿がその場から幻のように搔き消えた。

琴良が驚きの声を上げる。

それに伽藍は悪戯いたずらつぽい笑みを向けて得意げに言うのである。

「あら、驚いたあ～？ あたしの得意技は空間操作なお～。瞬間移動はお手の物なんだか

「は、はあ……なるほど……」

先ほどの竜司をあしらつた時のことを思い出してか、琴良は納得の表情を浮かべる。

百難伽藍の持つ力は、数ある『救世道者』の中でもあまり類を見ないものだ。空間を繋げる程
度は月夜反角^{ムカシカツ}、折^{ハサウ}、三ツ目^{ミツメイ}、二ツ目^{ニツメイ}、つまら^{ツマラ}うる。

度は朝餉前で新しい空間を生み出すことすら可能である。

「終わつたならととと帰れよ。それとも、ここで俺のどどめを刺しておくつてか？」

伽藍は血まみれで立つ竜司のことを、先ほどと変わらない微笑みを浮かべたままで見つめ返す。親愛を感じるはずのその笑みは、獲物を求める毒蜘蛛のよくなき危険な香りを放っていた。ほんの数秒の睨み合いによつて、二人の間に島詰まるよつた緊迫した空氣が生じる。

だが伽藍は不意にリリティカを見やつてから、肩を竦めてみせるのだ。

「やめておくわあ～。一号くんが本調子じゃないから、二号ちゃんがピリピリしてんんだも

「お～」

「賢明な判断だよ。つーか、その呼び方やめろってーの。いつも言つてるだろ」

「ほんとだよ！ ちゃんとリリティカ様つて呼んでよね！」

「ええ～、だつたらあたしのことも、伽藍さまつて呼んでほしいかもお～」

伽藍が緊張感のかけらもない笑顔を見せて、竜司はこつそりと胸を撫で下ろす。

今ここで伽藍を相手取つたところで、竜司は負ける気がしない。これまで何度も刃を交えたが、全戦全勝を收めている。だが、あれだけ血を流したせいか、伽藍の動きに対処しきれなかつたのもまた事実だ。そんな調子で易々と勝てるとも思えなかつた。

空気がほんの少しだけ緩む中、伽藍が周囲の血溜まりを指さして琴良に問いかける。

「ところで館宮さん。これ、どんな戦いだつたか教えてくれるかしらあ～？ 新入りさんたちは善戦したみたいだけどお～」

「え、えっと……」

突然話を向けられて琴良は戸惑いながらも、手短にその顛末を語つてみせた。

すると伽藍は顎を撫でながら、深々と嘆息して言う。

「ふう～ん……つまり、貴女を庇つて、一号くんは危なくなつたつてわけなのねえ～？ 思わ

ぬ取扱つてやつなのねえ～？」

しばらく伽藍は竜司たちと琴良、そして地面に刻まれたクレーターと血溜まりを熱心に見比べていたが、やがて一人でうんうんと納得顔で頷いて。

「決めたわあ～。決めちやつたわあ～」

伽藍は琴良に、その華奢な右手を差し伸べる。

「貴女はきっと魔獸討伐に一役買つてくれるに違いないわあ～。貴女さえ良ければ、
《災厄の魔獸》討伐に最適な特別寮に住んでみる気はなあい～？」

「え……？」

ほかん、と口を開いて琴良は固まる。

「あの、何か誤解されているみたいですけど、私は何もやつていませんよ～？」

琴良がやつたことと言えば距離を取つて観戦していたこと、最後の最後で巻き込まれかけたことくらいだ。ちゃんとその辺りも琴良は取り繕うこともなく説明していた。

戸惑う琴良に、伽藍は追い打ちをかけるよう語るのだ。

「四ヶ峰くんに、貴女が勇敢に立ち向かったからこそ、一号くんは怪我を負つたんじゃない。そういう因果あ～？ 流れえ～？ そんな不確定要素を味方につけるのも、センスの一つだと思うのよお～。それに貴女、骨があるみたいだしい～。因みにその寮にはあたしも入つてて、強くてすごい人はいつでも募集中なのお～。だ・か・ら」

伽藍は琴良に顔を近づけて、につこりと微笑む。

「このお話、受けてくれないかしらあ～？」

「え、えっと……その……」

琴良は応え辛そうに、竜司とリリティカの様子を窺う。

「……うん？」

その顔には『助けてもらった恩を仇で返すことにならないかしら』といふ葛藤が滲んでいた。

その葛藤はすぐに『でもさつき貸し借りはチャラになつたはずだし』という揺らぎに変わり。

「…………百難先輩」

「なあにい～？」

「その寮にいるのって……強い人ばかりなんですか？」

「ええそうよお～。聖討会の人間でも、そうそう入れないんだからあ～」

伽藍の言葉で、琴良は満面の笑みを浮かべる。今日で一番輝く笑顔だつた。

その笑顔は、『そこに行けば炎の剣士の情報が得られるかも?』という期待に満ちていて。

「そのお話！ 受けます!!」

「あらそお～？」嬉しいわあ～」

琴良はガシッと伽藍の手を握り返すのだった。

あまりにスマーズなその流れに、竜司とリリティカはそろつて面食らつてしまつたが、す

ぐに「一人とも我に返つて琴良に声をかける。おずおずと。心配そうに。

「え、あの。お前、それ……いいの？」

「琴良ちゃん……ちょっと考え直した方が……」

「いいに決まつてるでしょ！ 百難先輩！ どうぞよろしくお願ひします!!」

「うふふ～。じゃあ、善は急げで、行きましょ～かあ～」

「はい!!」

琴良は先を行く伽藍に続こうとして、最後にそつと竜司を振り返る。

その顔に浮かんでいたのは、昨日の集会で見せたような真剣な表情で。

「…………次に会つた時、色々聞かせてもらうわよ」

そう言い残し、琴良は伽藍と共に去つていく。

残された竜司とリリティカは、ただ顔を見合わせて。

「次に会つた時……かあ」

「わりと……早く会えると思うよね」

寂然としないながらも、二人の背中を見送るのだった。

四章

ほの仄かな疑惑

一年前のその日、少年は死んだ。

見渡す限り、どこまでも地獄の有様だった。

いくつもの煙がたなびき、空気には灰と土埃が入り混じる。

はるか遠くから鳴り響くサイレンの音、人の泣き叫ぶ声や、呻き声、誰かの名前を必死に呼ぶ声。それらが合わさり、不快な協奏曲を奏でていた。

それは突如起つた。

少年だけが外出していたその時間に、あの化けモノは現れた。

何が起つたかも分からなかつた。

熱や光が空を舞い、建物や道路がまるで玩具のように潰されていった。地面は抉れ、あちこちでは破裂した水道管から水柱が上がつていた。天災と呼ばれるどんな現象よりも、ずっと悪意に満ちた破壊の様を目の当たりにして、少年は命からがら家へと逃げ帰つた。

そして今、少年はたつた一人で座り込んでいた。

目の前にはうず高く積み上げられた瓦礫がある。

鉄筋コンクリート建ての普遍的な、一軒家だ。

そして、少年が両親と暮らしていた家でもあつた。

『……』

少年は瓦礫と化した家を見つめるだけだ。

家の中には父と母がいた。今、瓦礫の下には父と母がいる。

瓦礫を懸命にどかした末に見つけた二人は、すでに事切れた後だつた。

『……』

少年は家族を守れなかつた。助けることができなかつた。

無力感が全身を支配し、怒りも悲しみも湧いてはこなかつた。

ただ目の前に広がる光景に唇を噛み締めるだけだつた。

『……あ』

そんな時だつた。

ひどく弱々しい声が、少年の耳に届いた。

遠くのサイレンや叫び声に搔き消されてしまふほどの細い声。

『……あなたが』

少年が振り返つた先には見たこともない少女が立つていた。

長い銀髪と空を思わせる澄んだ青色の瞳を持つたその少女は、外国の、それも民族衣装じみた純白の衣をまとっている。

少女は悲しみを湛えた瞳で少年を見つめ、必死に手を伸ばしていた。

『わたしの探していた人……！』

気付いた時、少年はその少女の手を取っていた。

理由なんてどうでも良かった。少女の目的だって知つたことではなかつた。

ただ、助けを求める誰かを守りたかった。

見知らぬ誰かを守れるくらいに強くなりたかった。

その時少年を突き動かしたのは、たつたそれだけの想いだつた。

「う……うう……？」

眩む意識。浅い微睡みから目覚め、竜司は呻く。そして考える。思い出す。

（えーっと……あれからどうなつたんだつけか……）

直政と誉の二人を打ち破つたあと、竜司とリリティイカは自分たちの住処へと戻つて行つた。しかし帰り着いてすぐ、血を流しそぎたせいか猛烈な眠気に襲われて、血塗れの上着を脱ぎ捨てて、手近な場所で横になつた。そこから先は記憶がふつつりと途絶えている。

たしか談話室のソファで寝転んだ、と思う。

「あ、起きた？」

身じろぐとそんな声が頭上から降つてきた。目をこすりつつ体を起こすと、ソファの側にリリティイカがぺたんと座つてゐる。ほんの少しだけ眉を顰め、リリティイカは竜司に微笑みかけてきた。

「りゅーくん、うなされてたよ」

「……ああそう」

リリティイカの言葉にそっけなく返して、竜司は顔を背ける。

思い出した。さつきまで自分は夢を見ていたのだ。

そして、あれは野々柳竜司という少年が。

（俺が……人として死んだ日だ……）

竜司は無意識のうちに、拳を固く握りしめていた。血の気が失せて、白く冷たくなり始めたその手に、リリティイカが自分の手をそつと重ねる。ただ包み込むように触れ合つたその手からは、優しい温かさが伝わってきた。それに加えて、ほんの少しの悲しみも。

リリティイカは苦笑を浮かべて竜司を見つめる。

「いろいろ……ごめんね？」

「何を今更」

竜司はリリティイカの言葉を鼻で笑うようにして言う。

「俺は俺の好きなことをしているだけで、それが偶然お前の目的に合致していた。それだけだ」「りゅーくん……」

二人は口を閉ざして見つめ合い、しばしの静寂が場に落ちて——

ぐううううう。

「おう……」

「あらま」

唐突に、竜司の腹が顕著な自己主張を始める。

バツが悪くなつて頭を搔きつつ、竜司は窓の外を見やる。差し込む光はすっかり茜色に染まつていて、騒がしかつた今日という一日が、今にも終わろうとしていた。

竜司は肩を回しながら、リリティカに笑いかける。

「そろそろ時間だろうし、着替えて飯でも作るか」

「わーい！ 今日はご馳走？」

「まあ、そうなるかなあ」

きやつきやとはしゃべりリティカに竜司は苦笑を浮かべ。

「ひょつとしたら客が来るかもしれないし」

そう、小声でぼやくのだつた。

「ちょうどその頃。

「いみがわからない……」

琴良は自分のスーツケースを引きずりながら、ひたすら、ひたすら歩いていた。

あれから伽藍に連れて行かれたのは綾神学園高等部の職員室だつた。

ぼーっとコーヒーをすすつていた化野を捕まえて伽藍が何やら耳打ちしたかと思えば、様々

な書類にサインと判を求められ、簡単な地図と預けていた荷物を渡されて。

『やはり君は人一倍熱心な《救道者》だったのだな。精進したまえよ』

『あたしは用事があるから案内はできないけど、一本道だしすぐ分かると思うからあ～』
『は……はあ』

手を振る二人に見送られ、琴良は一人その寮へと出立したのだつた。

寮の名は、魔獸対策特別寮。

《救道者》の中でも一握りの実力者のみが住まつことを許される、特別な寮だという。

寮生は魔獸討伐における最大のチャンスと最高の支援が学園より与えられ、すべての

《救道者》から畏敬の念を抱かれる……と、伽藍と化野はざつくりと説明してくれた。

綾神学園は島の北東端に存在する。そして、その寮は島の南西端にあるという。

『直線距離にして……約十五キロ……っ！』

《救道者》たる琴良にその程度の行軍が苦であるはずもないが、地図を見ながら見知らぬ土地

を長時間歩くとなると、さすがに疲労が溜まつてしまふ。

島の中心部には修練場や娯楽施設、商店などが建ち並び、一種の地方都市を思わせた。

しかし寮の方角に進むにつれて文明の匂いはなりを潜めていき、気付けば鬱蒼と茂る林の中を歩いていた。時刻も夕暮れ時で、辺りには人どころか生き物の気配すらしない。だが地図が

指し示すのはこの方角だし、申し訳程度とはいえ先に続く道も整備されている。

しかしそんな先にあるという寮である。あまり設備面では期待できそうもない気がする。

水道も電気もガスも通っていない山小屋程度の粗末な建物を思い描き、琴良は気落ちする。

「でもまあいいわ……それもこれも、炎の剣を持つた《超道者》を探すためよ！」

これから自分の住む寮は、ごくごく一部の実力者のみが住まうことを許されるという。

設備はお粗末でも、そこに住んでいる人々は超が付くほど一級なのだ。

「だからきっと手がかりがあるはずよ……！ 百難先輩に炎の剣士について聞くのを忘れた

のは失策だったけど……あの人にはこれからいつでも寮で会えると思うし、その時間けば完璧た

のはず！ これはもう目標を見つけたも同然ね！」

一人きりで薄暗い森を歩き、自然独り言が多くなる琴良だった。

しかし、気になることは他にもある。

「野々柳竜司……か」

人類の敵……であるはずの存在。

だが、琴良はその事実に対し小さな疑惑を抱き始めていた。

敵であるはずの竜司は琴良のことを救つてくれた。それも二度も。

その上深手を負う寸前に、彼が呑いたおかしな独り言も気がかりだつた。

助けたのはただの気まぐれ。または興醒めな光景に対する制裁……おおむねそんな言い分

だつたと思うが、それを丸つきり信じるほど琴良は素直でもなかつた。

きっと竜司には何か秘密があるのだ。

寮まで歩く道中、琴良の頭の中はすつと竜司のことでいっぱいだつた。

本当に、彼は邪悪な魔獣と呼ばれる存在なのか。

本当に、自分たちが倒すべき敵なのか。

ぐるぐる考えるも、答えが出るはずもなかつた。

雑念を振り払うようにして琴良は足早に林の中を突き進み。

「あら……？」

気付けば、道の向こうに何やら開けた場所が見える。小走りで向かうと、そこで道と林は唐突に終わり広い土地が存在していた。学園のグラウンドほどもあるうかという広大なその土地の中心には、大きな家が一軒だけぽつんと建っている。

だが、そんなことよりも。

建物をぐるつと取り囲むようにして、大きな鉄製の柵が立っていた。柵には高圧電流を注意する看板が等間隔に掲げられ、物々しい雰囲気を醸し出して見る者を圧倒する。まるで刑務所のよう光景だ。

その他にもバイオハザードマークの立て看板やら、『!』マークの道路標識、『この先日本国憲法通り』などと書かれた怪しそうな警告文などなど。建物の周囲は、ありとあらゆる注意勧告のオンパレードとなっていた。

「……道を間違えたのかしら」

だが地図をどう見ても、示しているのは紛れもなくこの場所で、伽藍も『一本道だしすぐ分かる』と言っていた。琴良は首を捻りつつ、柵の入り口をくぐって敷地内に侵入し、恐る恐る建物に近づいてみる。

真新しいその建物の敷地面積はとても広く、二階建てで玄関は一つだけ。電気のメーターダット付いていて、外から見る限り、どこまでも普通の家だった。

だが、建物に近づくにつれて肌がひりつくような威圧感が強くなる。

得体の知れないこの世ならざるもの建物の内部で蠢き、獲物を待ち構えているような……！

そんな感覚に襲われて、琴良はいつでも戦闘に移れるよう気を引き締めた。

そして玄関の前に立った時、表札の存在に気付く。

曰く。

「『魔獣対策特別寮』……」

どんびしやだつた。

相変わらず妙な威圧感が漏れ出ているし、得体の知れない建物であることには変わりがない。しかし、ようやく琴良は合点がいって気を抜くのだ。

「強い奴らが住んでるなら……この雰囲気も納得できるかも？」

何しろ『救道者』の中でも群を抜いた実力者が集まる場所なのだ。

世界を救う力ということは、世界を滅ぼしかねない力でもある。そんな中でも枠外に強い者たちが集まるのなら、この厳重警戒や重々しい雰囲気すべてに納得がいく。

（そうよ！ 私の第一の目的は炎の剣士を探すこと！ 今はあいつのことなんて一旦忘れて、こつちに集中しなきや！）

琴良は脳内の竜司を追い出して、決意新たに寮を見上げる。

これから自分が住むはずの、そして炎の剣士の手がかりがあるかもしれない場所。

果たしてどんな出会いがあつて、どんな経験を積むことになるのだろうか。

期待と不安の入り混じる中、琴良は意を決し、寮に向かって叫ぶのだ。

「たのもー！」

しーん。

どうしよう滑ったか。琴良は不安に苛まれつつ、もう一度叫んでみる。
「えっと……すみませーん！」

しーん。

たっぷり一分待つてみても、返つてくるのはやはり静寂だけだった。

今度は大きく息を吸い込んで、あらん限りの大声で叫んでみる。

「あのー!! 新しく入寮することになった、節宮です!! どなたかいらっしゃいませんかー!!」

すると、ようやくドタバタと近づく足音が聞こえてきた。

ホツと胸を撫で下ろす琴良の目の前で、寮の玄関が開かれて。

「悪い悪い、待たせたな。ちょっと手が放せなくてさ」「…………は?」

平然と顔を出したその人物を前にして、琴良は完全に凍りつく。

動きやすいシャツとジーパンに、何故かエプロンを装備した少年。

それは紛れもなく、先ほどまで自分の脳内の大部分を占めていたはずの……竜司だった。

言葉を失い固まる琴良を、竜司は立ち話も何だからと寮の中……寮生のための談話室だとう部屋に通してくれた。

大きめのテレビやソファ一式、観葉植物の鉢やマガジンラックなどの家具がバランスよく配

置されており、なおかつ掃除が行き届いた広い部屋。空調も照明もほどよくて、なかなかいい環境だった。

「この談話室は共有スペースだけど、二階には一人ずつ個室があるんだ。普通の学生寮は二

人で一つの部屋だから、それを考えると破格の待遇だな」

「…………はあ」

寮について説明し始める竜司のことを、琴良は冷や汗をかきつつも半眼で見つめる。

あまりのことに驚いて言われるままに上がってしまったものの、現状がさっぱり理解できていなかつた。

「何故こんな場所に『災厄の魔獸』である竜司がいるのか。魔獸対策特別寮というのは嘘なのか。

ぐるぐる考え込み、琴良は一つの可能性に気付く。

ぱつとその場から飛び退いて、竜司から距離を取るべく壁際に逃げる。

「まさか……! あんた、この寮の『救道者』たちを始めたんじゃ……!」

『救道者』の中でも指折りの強者たちが魔獸を倒すべく集う寮である。彼らからしてみれば目ざわりなことこの上ないだろう。

「は? なに言ってんだ、お前」

しかし、竜司は半眼で首を捻るだけだった。

それが本気で理解不能といった表情だったので、琴良はうろたえてしまう。

かがたひどくしてこの寮はあんたがいるのよ!! おかしいでしょ!!

道に聞かぬが、いかがで、お前、おれに聞い、おれの、

卷之三

「ここ、俺とリリティカも住んでるんだけど？」

そんな暴言発言ばくだん

い
し
瞬
だけ、確実に時間が制止した。

そして一瞬の後、琴良は絶叫して竜司の胸倉に掴みかかる。

取り舌す琴良に対しで
竜吉は心底哀れな目を向ける。

スニ支綱が再びつれる場所がついて……ほか、虚びつこの？

いんや
それは正しいんだけど。
他には何か言われたか？

あとは……ソノの寄生はすべての『説道者』から長崎の念を抱かれるとかなんとか

「なんだ。全部ほんとのことじゃん。若干うまく伝わってなかつただけで」

卷之三

ああ。魔獣討伐への最高のチャンスつてのはそりや、簡単な話だ。

竜司は親指で自分のことを示し事もなげに言う。

俺たちと一緒に暮らしてれば、いつだって好きに殺れるだろ?」

ぐつつつ
……
!?

たしかに、生活空間の方が学校よりも隙間^{すきま}が生まれやすく、討伐には適した環境となるだろう。
かんしんする意味合^{いみあ}いも含めて、一つ星^一銀^銀の下での共同生活^{きょうどうせきやく}にかなつた話かもしれない。

監視する意味合いも含めて、一つ屋根の下での共同生活は理に叶つた話かもしれない。
だが、突飛すぎるにも程がないだろうか。君子危うきに近寄らず、という昔の偉い人の言葉
を鼻で笑うような暴挙だつた。虎穴に入らずんば虎児を得ず、とも言うものの。

「畏敬の念つてのは『うわあ……あいつ頑張るなあ……』つていうドン引きかな。一週間以上持つた奴がこれまでで伽藍しかいねえからさ。誰も入りたがらないんだよな」

「ああ……あの人遅しそうだしね……う、うん？ ちょっと待つて今聞き逃せない」と言つたわね？! 一週間以上持つたのが百難先輩しかいないなら……つまりこの寮つて——」「俺たち『災厄の魔獣』の二人と、『救道者』は伽藍しか住んでねえぞ」

「なつ……!?」

つまり、あの先輩はたった一人で『炎厄の魔獣』二体を相手取りこの寮で暮らしていたのか。琴良は伽藍の底知れない強さに戦くとともに、同時にほんの少しだけ安心感を覚えた。この寮にたとえ『炎厄の魔獣』二人がいたとしても、そんな実力者たる伽藍がいるとなれば心強い。

二対二ならまだなんとかやつていける気もするし……。

そう安堵する琴良に、竜司が「でもよ」と補足する。

「伽藍は聖討会の諸々で忙しいみたいなんだ。おかげで滅多に帰つてこなくて、この家はほぼ俺たちの貸し切り?」

二対一、ではなく二対一だった。

せんきょう 戰況は絶望的だった。

独占? みたいな感じでさあ

「帰るわ!!」

「やめといた方がいいと思うぞー」

荷物を抱えて踵を返しかけた琴良に、竜司がのんびりと声をかける。

「この寮、日没とともに全部の窓と出入り口がロックされるんだよ。無理に壊して外に出ると、島中に警報が鳴り響く仕様でさあ。前に寝付けなくて外の空気を吸おうと思つてドアを破壊した時なんかよ、もう一瞬で実力派の『救道者』どもに捕まられて——」

「もういいわ……」

気力も尽きて、その場にへたり込む琴良だった。気付けばもう窓の外は夜の藍色に染まり始めている。いくらなんでも転入初日から島全体を騒がすような問題を起こすわけにはいかないだろう。

沈む琴良の肩を、竜司は励ますように叩いてやる。

「まあ、そんなに嫌なら明日学校に行つて化野先生に言えよ。明日は土曜だけど、あの人なら多分学園にいると思うからさ」

「えつ……そ、その……」

願つてもないはずの言葉に、琴良は心の底から頷くことができなかつた。

ここには炎の剣士についての手がかりを求めてやつてきたはずなのだから、『炎厄の魔獣』しかいないような魔窟だと分かれば用はないはず。早々に逃げるのが最も賢い手段と言える。だが、琴良はその賢い選択に迷つたのだ。

言葉に詰まりつつ、琴良は竜司の顔をちらつと見やる。

本当に彼が『炎厄の魔獣』と呼ばれる存在なのか。一体どんな秘密を抱えているのか。それについて知りたいと思う気持ちが溢れ、琴良は突き動かされるようにして口を開く。

「……私言つたでしょ。次に会つた時にいろいろ聞かせてもらうつて。あんたたちは、一体何を隠しているの?」

「さあね」

すると竜司は苦笑いしつつ肩を竦めてみせるだけだった。
まぎれもない誤魔化し。だが、それは同時に秘密を抱えていることへの肯定でもあった。
夜間に沈む外の静寂が寮の中にも伝染して、言いしれぬ緊迫感が満ちていく。

「そう……分かつたわ」

琴良は小さく頷き、ゆっくりと立ち上がる。

ここまで大人しく引き下がるつもりなど、毛頭なかつた。

「野々柳竜司!!」

琴良が声を張り上げた瞬間、周囲の空気が爆発的な熱を持ち、渦巻く気流へ変貌する。
突然のことにより竜司は目を丸くしてたじろいだ。その動揺を、好機を逃すことなく琴良は続ける。竜司の鼻先にびしっと人差し指を突きつけて、宣言する。

「私と勝負なさい!! それで、私が勝つたら秘密を喋るのよ!!」

「は……?」

「りゅーくーん。お風呂掃除終わつたよー……え、なにこの空気?」
ひょっこりと部屋を覗き込んだリリティカが、のほほんと首を傾げた。

◆試読版はここまでです。続きは「世界の敵の超強撃！」本編でお楽しみください。
オーバースペック